





# 目次

鬼魔王の復活 . . . . .	1
勇斗とスティーブン . . . . .	7
百鬼夜行と最後の夜 . . . . .	14



## 鬼魔王の復活

明治3年に鉄道が始まってイギリスから輸入した蒸気機関車の1号が動かずに3号が動いた。政治家の大久保利通は新橋から横浜まで鉄道を考えた。政治家の西郷隆盛は軍施設があるからと反対した。

海上に石垣を積み重ねた土台にレールを作った。鉄道開通式で政府内に隆盛も蒸気機関車に乗車していた。伊賀藩の忍びの相生勇（そうじょういさむ）は京都で刀を手にして、口寄せの術で大鷹を呼んで大鷹に乗って越前藩の毘沙門岳へ向かっていった。勇は毘沙門岳のふもとに着いて大鷹から降りて毘沙門岳を登っていった。大鷹はどこかへ去っていった。勇は毘沙門岳の頂上付近まで登ってきて、寺の見えるところにやってきていた。寺に着いた勇は、僧侶に渡した刀を神棚に置かれて般若心経を唱えられた刀に般若波羅蜜多と刻まれた。勇は僧侶から新たな斬妖刀を受け取って寺を出ようとしたときに大和の大蛇のような第六天魔王が現れて、勇に襲いかかっていった。第六天魔王は勇に口から火炎を放っていった。火炎を避けていった勇は第六天魔王を斬妖刀で斬り裂こうとしたが、手がおえなかった。勇は僧侶たちが般若心経のお経を唱えて怯んだ第六天魔王を斬妖刀で斬り裂いて倒した。勇は僧侶たちにお辞儀をして毘沙門岳を降りていった。勇は口寄せの術で大鷹を呼んで大鷹に乗って伊賀の里へ戻っていった。古に勇敢な武士の荒武者たちはこの寺で般若心経を唱えて鬼頭の酒吞童子を般若波羅蜜多と刻まれた斬妖刀で斬り裂いて首を斬り落としたと言い伝えある寺だった。江戸初期にて、寺で先祖である相生悟（そうじょうさとる）が倒した酒吞童子の手下の鬼たちと妖たちが一緒に村人を襲っていった。手下の鬼たちは酒吞童子を倒した者たちを探して悟に敵討ちするために村人を苦しめた。悟は村が襲われてると聞いて村にやってきた。悟は赤鬼に、「私が酒吞童子を倒した」と言った。赤鬼は、「長い時間を経て、とうとう探し出したぞ！」と言った。斬妖刀を抜いた悟は、手下の鬼たちと戦った。悟を虐（しいた）げる鬼たちは、悟に武器で攻めて追い込んだ。手こずった悟は鬼たちに捕らわれてしまった。鬼たちは悟を酒吞童子と和尚がいなくなった寺に連れていった。寺まで連れてきた赤鬼は悟に、「おまえは断じて許さないことにした。よって獄門岩の刑に処す！ 岩に正座させた状態で散々苦しめた後で大釜で煮込んで喰べる」と言った。よく肥えた出っ腹で化け狸の隠神刑部（いぬがみぎょうぶ）が現れた。隠神刑部は青鬼と黄鬼に、「ちょっと待て！ その男の命を預かる。悪人から山狸たちを助けてくれた」と言った。赤鬼は、「断る！ 鬼頭を遣った許しがたい男だ！」と言った。隠神刑部は、「そうか仕方がない！ 他の手を使ってやる！」と言って寺を出ていった。隠神刑部は寺から山のふもとを下りて村の通りを歩いて行ったときに、いつもの残骸が転がっているのを見つけた。隠神刑部

は屍の残骸を選びすぐりで選び妖を造り出した。その妖は猩猩（しょうじょう）というオラウータンに似た赤毛の毛むくじゃらな人猿である。隠神刑部は猩猩に、「鬼に捕らわれた悟の子孫が時を越えてきていた。勇のいる時代に行って、悟が危ないと告げてくるんだ！」と言った。明治初期の伊賀の里にて、勇は忍者屋敷の庭で薪を割っているときにタイムワープしてきた猩猩が現れた。勇は猩猩に、「幻か！ 夢か！」と言った。勇を驚かした猩猩は、「おいらは猩猩だ！ 先祖の悟が危ない！ 助け出さないとおまえの存在も消える」と言った。勇は、「どうやったら江戸時代に行ける？」と聞いた。猩猩は、「ここから入っていく！」と答えた。勇と猩猩はタイムワープする空間に入ってしまった。甲賀藩の甲賀の里にて、甲賀盗賊団の新崎渉（しんざきわたる）が率いる甲賀盗賊五人衆は沢山の金塊が手に入ったことを喜んだ。甲賀盗賊五人衆は沢山の金塊を地下にある扉の施錠を解いた金庫室に運んでいって、誰にも入れないように金庫室の扉に鎖を巻きつけて施錠した。渉は馬車を戻しに伊賀の里へ向かっていった。伊賀の里にたどり着いた渉は、忍者屋敷に向かい、勇を訪ねたけどいない様子だった。渉は勇が毘沙門岳にある曹洞宗の寺から戻ってないのかと思って、甲賀の里へ帰ろうとしたときに、別の忍者屋敷から勇の実妹の雛形愛（ひながたあい）が現れた。愛は渉に、「渉じゃないか！ 久しぶり！ 兄上はとっくに曹洞宗の寺から戻って私に新しい斬妖刀を見せてくれた！」と言った。渉は、「勇はどこに行った？」と聞いた？ 愛は、「兄上は庭で薪を割っていたけど、その後のことは私も知らない」と答えた。渉は、「そうか！ またお邪魔する」と言って凧に乗って空を飛んで伊賀の里を離れていった。空の上で凧に乗った渉は、「勇に勝ったときのことを思い出した。勇は渉に、「よっ久しぶり！ 頼みがあるんだ！」と言った。渉は、「ここは甲賀の里にある甲賀村なんだ！ なんの用だよ！」と言った。勇は、「未来のアメリカにいるスティーブンという者を助けに行ってくれないか？ それから鎌鎖を貸してくれないか？」と聞いた。渉は、「冗談じゃない」と答えた。勇は渉にスティーブンがロス郊外に住んでいる居場所の地図を渡して見せた。渉は、「受け取れない」と言って振り切った。勇は、「ならば腕づくで応じてもらう」と言って刀を抜いた。渉は、「そんな迷惑だ！」と言って棍棒槍を構えた。勇は中段構えで斬ろうとしたが渉が左右に突いてきて、左右に払っていって、後ろに一歩さがった。勇は火遁の術で手のひらから火炎を放ったが、渉が水遁の術で手のひらから水勢を放って火炎を払われた。勇は、「待て！ 坂本龍馬が俺に預けた金塊の在処を記した地図と引き換えにどうだ！」と言った。渉は、「金塊すべてくれるなら」と言った。勇は、「いいぞ！」と言った。渉は、「それなら引き受けた」と言った。勇は、「もう深い繋がりだ！ 伊賀の里に入ってもいい！ 放し飼いにした隼という馬を捕まえて馬車と繋いでいってくれ！ 約束を破るなよ！」と言って金塊の宝箱のありかを記した地図とスティーブンの居場所の地図を渡した。渉は馬鹿いな！ 俺が約束を破る訳ないだろう！ それに鎖鎌なくてもモンスターを倒せるブーメラン型手裏剣がある」と言った。勇は、「俺は信じる」と言って去っていった。渉は勇がどこへ行ったのか心配しながら甲賀の里へ戻っていった。愛は伊賀の里で隼を馬車からはずして放し飼いにした。勇は猩猩と一緒に不思議な時空から戦国時代にタイムワープをしてきた。織田信長と豊臣秀吉の政権を持つ安土桃山時代が終わって徳川家康によって江戸初期（慶長8年）1603年に江戸幕府が確立した。家康は江戸時代（徳川の時代）になって江戸幕府を開設して江戸城に移行するまで駿河国の駿府城で城下町の藩士と

商人と村人たちが争いごともなく平和に暮らしていた。京の都（平安京）の帝（みかど）で百鬼夜行が起きた騒動で町が壊滅状態となって鬼たちが住み着いた。鬼頭を失った鬼たちは京をさまよって、村人から鬼頭を倒した者を聞き出していくうちに自ら現れた悟を寺へ連れ去った。勇と猩猩は近江国（滋賀）の彦根藩の琵琶湖から近くの怪しげな寺へ向かっていった。勇は猩猩と一緒に寺へ向かった途中で隠神刑部と出会った。隠神刑部は勇に、「江戸によくこそ！ 勇さん！ お待ちしてました」と言った。勇は、「あんたが俺をここに呼び起こしたのか？」と聞いた。隠神刑部は、「そうですよ！ あなたの先祖である悟さんは悪人から狸一族の山狸を助けてくれた」と答えた。勇は、「俺を呼び起こしたのは悟の身に何かあったから？」と聞いた。隠神刑部は、「悟は京の都で百鬼夜行が起きて鬼たちに連れ去られた。鬼頭をやった悟に罰を与えるためだ！」と答えた。勇は、「今、悟はどこにいる？」と聞いた。隠神刑部は、「あの山に見える寺にいるだろ」と答えた。勇は、「わかった！ ひとつ聞きたい事がある。どうして江戸にタイムワープできたんだ？」と聞いた。隠神刑部は、「猩猩は私が村の残骸を集めて選りすぐりで選び造り出した妖だ！ 夢の中で起きてる幻に現れた者がいれば時を越えて呼び起こす妖術を持ってる。悟の夢か思い描く中に入って見つけた勇を追ってきた」と答えた。勇は、「夢の中に入るなんて！ 不思議な能力だな！ 人間のできる術じゃない！」とやった。隠神刑部は、「夢を食べる獺（バク）という動物のようなものだ！ 獺は悪夢を食べてくれる夜の守り神としてなった！ 悟は鬼たちに殺される悪夢を見て勇に助けを求めている」と言った。勇は、「そうだな！ よし！ さっそく寺に向かうとするか！」とやった。隠神刑部は、「気をつけてください！ 寺に鬼頭の手下の茨木童子と赤鬼と青鬼と黄鬼がいる」と言った。勇は猩猩と隠神刑部と一緒に寺へ向かっていった。寺に着いた勇斗と猩猩と隠神刑部は境内で悟が獄門岩に正座して両腕を後ろに縄で縛られていた。悟は獄門岩で正座した体勢を崩そうとしたら青鬼と黄鬼が棒で悟の背なを叩いた。勇は猩猩に、「君はあその茂みの奥にでも隠れていてくれ！ 君の身に何かあったら俺が元の時代に戻れなくなる」と言った。猩猩は、「わかった！ 終わったらこの笛を鳴らしてほしい」と言って勇に笛を渡した。勇は、「どうも！」と言って隠神刑部と一緒に境内で獄門岩に正座させられている悟のところへ向かった。青鬼は悟に、「おまえはこの寺で鬼頭の酒呑童子を倒した。鬼頭がおまえの最後を見届けてくれる」と言った。悟は、「そうもいかなねえ！ 必ずやわしの助けがくる」と言った。黄鬼は悟に、「おまえは明日の朝まで獄門岩の刑に処されて大釜で煮込まれて茨木童子に喰われる」と言った。悟は、「そうはさせなねえ！ おまえらに大釜で煮込まれた茨木童子を喰わしてやる」と言った。黄鬼は、「黙れ！」と言って棒で悟の両足を突いた。青鬼は、「気が変わった！ おまえを先に大釜で煮込んでやる」と言って寺にいる疫神の赤鬼と茨木童子を呼びに行った。黄鬼は悟に、「その傷んだ足で逃げることもできまい」と言って大釜を乗せる炉壇の中の薪に火を点けた。悟は、「逃げる訳ないだろう！」とやった。勇は隠神刑部に、「今のうちに悟を助け出そう！」とやった。隠神刑部は、「そうですね！ 急ぎましょう！」とやった。勇と隠神刑部は獄門岩に正座させられている悟のところにいて、悟を両脇で支えて獄門岩の刑を抑えた。赤鬼と青鬼は水の入った大釜を両腕で支えて持ってきたら炉壇に乗せた。青鬼は黄鬼に、「おい！ 悟はどこに行った！」とやった。黄鬼は、「あれっ！ 逃げれるはずがないのにどこに行ったんだ！」とやった。赤鬼は黄鬼に、「馬鹿野郎！ 何をしてい

る」と言った。黄鬼は、「まだその辺にいるはずだ！ 探しましょう！」と言って赤鬼と青鬼と一緒に悟を探しに行った。悟を連れた勇と隠神刑部は、悟をヒコズりながら歩いて境内を抜けて寺門を出ようとしたときに、赤鬼と青鬼と黄鬼がやってきた。勇は悟に、「大丈夫！」と言って悟を座らした。悟は、「勇か！ あのときのまんまだな！ なんでここに？」と聞いた。勇は、「その理由（わけ）は後でいうから！」と答えた。悟の肩腕から離れた勇は隠神刑部に、「悟を任せな！」と言った。隠神刑部は、「わかった！」と言った。勇は赤鬼と青鬼と黄鬼に、「おまえらに悟は絶対に渡さない！」と言って赤鬼と青鬼と黄鬼に立ち向かった。赤鬼は、「きさまか！ 悟と一緒に酒呑童子を倒した者は？」と聞いた。勇は、「そうだ！」と答えた。青鬼は、「もうひとり南蛮人の者がいただろう？」と聞いた。勇は、「知らねえな！」と答えた。黄鬼は、「コイツらまとめて片付けましょう」と言った。赤鬼は勇に金棒で攻撃していった。勇は金棒を振り回してくる赤鬼の攻撃を避けていった。勇は赤鬼に火遁の術で炎を放って、赤鬼の攻撃を払って斬妖刀を抜いた。青鬼は勇に刺股（さすまた）で攻撃していった。勇は斬妖刀で青鬼が攻撃してくる刺股を払ったが、塀のところまで追い詰められていった青鬼に刺股で首を持ち上げられた。青鬼は勇に、「南蛮人の者はどこにいる？」と聞いた。勇は、「どこにいるか分からない！ 俺たちは未来からやってきた」と答えた。青鬼は、「嘘つけ！ もう国へ帰ったか？ 確かにおまえは年をくってない！」と聞いた。勇は、「俺は本当にわからない！ あいつはアメリカ人だ！ まだアメリカは出来てない！」と答えた。黄鬼は、「仕方がない！ ならば体で聞くしかないだろうな！」と言って勇を両刃のこぎりで切り刻もうとした。隠神刑部は悟に、「少しの間です。ここで待っておいてください！」と言って悟を地面に寝かせた。隠神刑部は青鬼と黄鬼に双銃で撃って攻撃を抑えた。青鬼は隠神刑部に双銃で腹を撃たれたが、勇の首を持ち上げた刺股を下ろした。黄鬼は隠神刑部に背なを撃たれた。赤鬼は屏によすがって座ってる勇に金棒で攻撃していった。勇は赤鬼の金棒の攻撃を避けて塀に穴をあけた。立ち上がった勇は、赤鬼に火炎火遁の術で火炎を放って金棒の攻撃を抑えて斬妖刀で赤鬼を縦斬りで斬り裂いて倒した。赤鬼は切り傷を治って立ち上がった。勇は赤鬼に、「おかしい！ なぜ斬妖刀が効かない！」と言った。赤鬼は、「わしらにそんなへボな刀は通用しない」と言った。青鬼は銃弾を受けた腹の傷が治って口から銃弾を吐き出した。黄鬼は銃弾を受けた背なの傷が治って口から銃弾を吐き出した。隠神刑部はすぐ取り出した棍棒の先が太い円柱形の仙棍棒で青鬼と黄鬼を打ち飛ばして勇を金棒で叩こうとする赤鬼を打ち飛ばした。赤鬼だけは沸騰した大釜に落ちて大釜が割れて熱湯がかかって火傷を背負った。寺から赤い肌で2本の角が生えた黒い長髪の茨木童子が現れた。茨木童子は赤鬼と青鬼と黄鬼に、「おまえたちは人間ごときに何をしてる」と言った。青鬼は、「ひとり妖がおる！」と言った。黄鬼は、「そうですよ！ あの狸親父が仙棍棒という仙の太鼓判で打たれたら打ち飛ばされました」と言った。赤鬼は、「人間のほうもなかなかやっつけやがりますよ！」と言った。茨木童子は鬼たちに、「早く立ち上がれ！」と言った。青鬼と黄鬼は立ち上がった。赤鬼も立ち上がった。茨木童子は鬼と隠神刑部に、「よくも鬼頭の酒呑童子をやってくれたな！ おまえたちは生かしてここから出さないぞ！」と言った。勇は、「鬼は疫病だ！ 駆除しないといけない！」と言った。隠神刑部は、「人間を恨んでいたのに悟のお陰で狸一族は悪人から救われて考えが変わった！ 悟は我々の救世主だ！ 悟りをなんとしても助けだす」



と言った。茨木童子は、「酒吞童子は幼い頃からの特殊な才能に恵まれた。それが災いで6歳にして母親に捨てられて放浪するまま鬼となったが、わしは生まれたときから歯が生えていたから鬼子と呼ばれた。酒吞童子の家来となって、完全な鬼として酒吞童子に仕えた。酒吞童子がいなくなった時から一番弟子のわしが鬼頭の代わりだ！」と言った。勇は鬼たちに、「鬼さんたち！ そんな話などどうでもいいからさっさと戦いましょう！」と言った。隠神刑部は、「なんとしても悟をここから連れ戻す」と言っただ。身長2メートルで若い茨木童子は、「許さん！」と言って勇と隠神刑部に大きな金碎棒をふるっていった。勇と隠神刑部は、茨木童子が振う大きな金碎棒を避けていった。そのときに伊賀の里から集まった忍者隊がやってきた。忍びたちは悟を連れ戻そうとする鬼たちに忍術と剣術で攻撃して振り払った。忍者隊長は悟に、「お師匠様！ 助けに参りました」と言って悟を寺から外へ連れ出していった。悟は、「斬妖刀を寺に置いたままにである！ 取りに行ってくれぬか！ 仏像のある広間のどこかにだ！」と言った。忍者隊長は、「わかりました」と言って悟を家来に任して寺に戻っていった。忍者隊長は勇と隠神刑部が茨木童子と戦っている最中に横切って寺に侵入しようとしたら、茨木童子が大きな金碎棒を振ってきた。忍者隊長は勇に茨木童子の大きな金棒の攻撃を避けようとしたときに助けられた。勇は忍者隊長に、「危なかったです。どこ行く気ですか？」と聞いた。忍者隊長は、「師匠の斬妖刀を探しに行く！」と答えた。勇は、「わかった！ 俺たちがこの鬼と戦ってる間に探しに行ってくれ！」と言って鬼に立ち向かった。忍者隊長は寺に入って仏像のある広間へ向かった。忍者隊長は仏像のある広間に着いて徳川家の葵の家紋のある赤い鞆の斬妖刀を探して見つけた。忍者隊長は斬妖刀を手にして仏像のある広間から出て、寺から外へ出ていった。勇は忍者隊長とすれ違って手に持っている斬妖刀を見て少しの間だけ貸してほしいと思った。勇は忍者隊長に、「待て！ その斬妖刀を少し間だけ貸してくれないか！ 俺は悟の血族だ！ どうせ俺に受け渡す！」と言った。忍者隊長は、「わかりました。その代わりにあの鬼を倒してください」と言っただ。勇は、「任しておけ！」と言って斬妖刀を受け取った。茨木童子は勇に向けて大きな金碎棒で攻撃しようとしてきたときに、隠神刑部の仙棍棒で打ち飛ばされた。勇は背なに背負ってる黒い鞆と赤い鞆から二つの斬妖刀を抜いて両手に持った。勇は立ち上がる茨木童子に二つの斬妖刀の二刀流で攻撃していった。勇は茨木童子が振り回した大きな金碎棒を避けて行って二つの斬妖刀を振っていった。勇は茨木童子が大きな金碎棒を振り上げたときに、隙をついて茨木童子の横腹を横斬りで斬り裂いて背なを斬り裂いた。ダメージを受けた茨木童子は大きな金碎棒で勇を叩き上げようとしたときに、勇に斬妖刀で右腕を切り落とされた。勇は茨木童子に、「両手ないと金碎棒は振るえないぞ！」と言っただ。地面に膝をつけた茨木童子は、「さあどうかな！」と言っただ。闇雲から酒吞童子が現れた。勇は酒吞童子に、「生きていたか？」と聞いた。酒吞童子は、「われは茨木童子と同様で何度でも30年ぐらいたら生き返る」と答えた。酒吞童子は、「われは首を斬られて頭を落としたときに、闇雲に吸い込まれて魔界に招かれた」と言っただ。茨木童子は酒吞童子に、「やっぱり生き返ってきた！」と言っただ。酒吞童子は、「そして、われは魔界より無敵の力を得た」と言って鬼魔王と変貌していった。茨木童子は横腹と背なの切り傷が治って右腕をくっつけた。伊賀の里の忍びの一人は忍者隊長に、「ほとんどの忍者隊は3人の鬼に遣られて全滅です」と伝達した。赤鬼は鬼魔王に、「酒吞童子様！ 戻って参りまし

たね！ 鬼魔王となられたところを拝見してました」と言った。鬼魔王は、「われは魔界から鬼魔王として復活したのだ！ すべての鬼どもはわれに逆らえない！」と言った。青鬼は鬼魔王に、「鬼魔王は前に護法童子に魔界へ追放されていた」と言った。鬼魔王は、「魔界の天魔が、われに鬼魔王の力を与えた！」と言った。黄鬼は鬼魔王に、「鬼魔王は鬼頭の酒吞童子の体を借りて復活した」と言った。鬼魔王は、「そうだ！ われが鬼魔王だ！ 酒吞童子はもういない！」と言った。勇は茨木童子と赤鬼と青鬼と黄鬼に、「酒吞童子は生きていたのだからもう悟に関係ないだろう！ 悟を見逃してくれ！」と言った。茨木童子は、「そうもいかない！ わしらに刃を振るった者を許す訳にはいかない！」と言った。寺に戻ってきた黒鬼と緑鬼は、護衛する忍びたちを倒して寺から罰を逃れた悟を捕えた。勇は隠神刑部に、「おしまいだ！ 斬妖刀の効果ない！」と言った。隠神刑部は、「恐らく鬼魔王に仙棍棒も効果ない！ ここは囚われ身となるしかあるまい！ 私には他に別の手がある」と言って妖術で仙棍棒をどこかに隠した。悟と勇と隠神刑部と忍者隊長と忍びの一人は鬼たちに捕らわれていった。

## 勇斗とスティーブン

悟と勇と隠神刑部と忍者隊長と忍びの一人は鬼たちに寺へ連れて行かれて地下牢に閉じ込められた。勇は隠神刑部に、「さっき他に手があると行ったけど、どんな手がある？」と聞いた。隠神刑部は、「私には妖使いができて、寺の外にいる猩猩を操ることができる」と答えた。勇は、「猩猩を操ってまた誰かの思う描く中へ入って助っ人を呼んでくるのか？」と聞いた。隠神刑部は、「そうです」と答えた。勇は、「地下牢で施錠をかけられて閉じ込められてる。どうやったら外にいる猩猩をここへ呼び寄せるんだ？」と聞いた。隠神刑部は、「ここは悟が捕らわれたときと同じ地下牢だ！ また猩猩を操って呼び寄せれる。勇さんが持つてる笛を吹いても呼び寄せます」と答えた。勇は寺の地下牢でスティーブンのことが気になって、「俺は時空転送の門をくぐった魔界支配を目論む物の怪を追って時空転送の門をくぐってタイムトラベルした平成後期ですべての物の怪を倒した後で自宅マンションで小雪娘の物の怪だった元彼女の川村沙織（かわむらさおり）とマンションの屋上でゆっくり寛いでいたら時空転送の門をくぐってアメリカの未来からきたスティーブン・ルノーという者と出会って、沙織と一緒に3人で旅に行く約束をして与那国島へ向かった。俺は平成後期では相生勇斗（あいおいゆうと）と名を変えていた。スティーブンと俺と沙織は与那国島に着いて別行動した。スティーブンは海底遺跡でスキューバダイビングに行った。勇斗と沙織はジェットスキーに乗りに行った。俺たちは海で遊んでる最中に大地震が起きた思いと海底遺跡が海水面に現れていた。スティーブんとバディの町田と水中考古学者で船長の森脇博士と俺と沙織と一緒に海底遺跡を調べることにした。森脇博士は海底遺跡のカイダ文字を解読して巨大なカメのモニュメントの全員で乗ってカメのモニュメントが下がったので降りたらカメのモニュメントが崩れ落ちた。俺たちは穴の底まで行く螺旋階段を下りて海底都市に着いてピラミッドを見た。俺たちはピラミッドの入り口に入ると森脇博士がカイダ文字を解読していくうちに、秘宝ハンターのマービンたちと出くわして俺が仕掛けを乗り越えていった。俺たちは石室に入って行って、大量の銅鏡に囲まれた棺を見た。マービンは棺を開くと森脇博士が、『卑弥呼のミイラだ！』と言った。マービンは卑弥呼のミイラの側にある金印を奪って猟銃で俺たちを殺そうとしたときに、浮かび上がっていった大量の銅鏡から光の宮殿に集まった光が大量の銅鏡に反射して照らされた卑弥呼が蘇った。卑弥呼はマービンに、『金印を戻せ！』と言ってマービンから取り戻した。卑弥呼は金印を持ってピラミッドの天辺に立って金印と奪おうと半魚人と戦って決着がついて半魚人が持った銀印を奪って海底都市と民衆たちが蘇った。だけど日蝕が起きて光の宮殿から海底都市に光が閉ざされた。卑弥呼はピラミッドの石室の棺に戻ってミイラとなった。天然痘の疫病で滅んだ民衆たちは倒れ込んでミイラとなって砂になった。俺たちは地震の揺れを

感じて螺旋階段へ走って行って、螺旋階段を上がって行って、外に出た。俺と沙織はすぐにジェットスキーに乗った。スティーブンと森脇博士と町田はすぐに船に乗り込んだ。カメのモニュメントは元の状態に戻って行って、ブロックされた。その後海底遺跡は段々と海に沈んでいった。卑弥呼はアマテラスだったことで、『子孫を天皇として祀れ！』というように徳川家康が天皇の代わりに中央政権を持って幕府を立ち上げることに思わしくなかった。俺と沙織とスティーブンは小型機に乗って関西空港に向けていった途中で赤紫色の煙に巻かれたときから異変が起きて関西空港の滑走路が見つからず琵琶湖周辺に緊急着陸した。俺たちは小型機から降りてみると、織田信長と侍たちが鉄砲を向けて待っていた。俺たちはそのときここが戦国時代だと知った。俺と沙織とスティーブンはパイロット二人とCA二人と乗客たちと共に捕らわれて信長の安土城の屋敷の檻に連れて行かれた。何日かして信長は明智光秀軍によって本能寺の変で敗れて明智軍が安土城を占領した。俺たちは自由の身となってスティーブンと一緒に安土城天主閣にいる光秀に会わせてもらいに行った。俺は光秀に、『未来の彼方からやってきた忍びです！豊臣秀吉は裏切って豊臣軍が攻めてきます！3日後に一騎打ちするでしょう！家康が天下統一を果たして寒村に徳川幕府を開こうとしているので阻止しようとしています！』と言って歴史をすべて変えて徳川幕府を開かさないと天皇中心のままの政権で赤紫色の煙のアマテラスの呪いの層を解こうとした。光秀は、『なぜそのようなことをいう！なんじが天下を取れぬと申すか！』と言ったことにスティーブンは光秀に、『違います！』と言ってくれた。俺たちは光秀に兵を呼ばれて天守閣から追い出された。俺たちは小型機に向かっていったパイロット二人とCA二人と乗客たちと沙織のいる小型機へ向かっていった。俺たちは小型機に着いたけど沙織たちの行方がわからず探しに向かった。俺たちは向こうに見える山に靄（もや）のある怪しい寺を見て、そこへ向かっていった。怪しい寺に着いたスティーブンと俺は寺内に入ると、盲目で坊主の和尚さんを見た。俺は和尚に、『ここに20人ほど変わった格好したならず者たちを見てませんでしたか？』と聞いた。和尚は、『そのような者は見てない！』と答えた。スティーブンは和尚に、『嘘をつけ！あそこ20人ぐらいの靴が置いてあるぞ！』と言った。和尚は、『やつらは鬼の生贄だ！おまえらも鬼に喰わせてやる』と言って数珠を持った和尚が立ち上がった。俺はスティーブンに、『あんまり拘らないほうがいいみたいだ！』と言った。スティーブンは、『そのようだな！』と言って俺と一緒に和尚に立ち向かっていった。俺とスティーブンは和尚に素手で攻撃をしようとしたが、和尚の手のひらから出る気で飛ばされていった。俺は黒い装束を装って忍者となって、和尚の顔や胸を目掛けて手裏剣を投げてが和尚の気の力で吹き飛ばされた。俺は和尚に向けて手裏剣爆弾を投げた。和尚は気の力で弾き飛ばしたが弾いた力で爆発して床に伏せて倒れた。スティーブンは和尚に近づこうとしていたら、和尚がいきなり立ち上がって少林寺拳法で攻撃してきた。スティーブンは得意なマーシャルアーツで攻撃を仕返していった。和尚はスティーブンに右手で左手で顔を打とうとしたが、スティーブンの受け身でかわされていった。スティーブンは和尚に左拳で右拳でパンチしようとしたが、和尚が黄色い着物の袖を回してスティーブンの右腕に巻き付けて右拳を留め、右手で3回掌底打ちをして、2本の指で急所の目打ちしようとした。スティーブンは和尚の目打ちを左腕で払って和尚の後頭部にキックして、右腕を巻き付けられる袖を解き払った。俺は和尚に右足で左足で蹴りを入れよう

としたが、和尚が攻撃をかわして、俺の足を掴んだら顔に鉄槌打ちをして急所の金的蹴りしようとした。俺は和尚の顔に回し蹴りを入れて和尚が床に横たわった。スティーブンは俺に、『和尚が立ち上がって復活するぞ！』と言った。立ち上がった和尚は俺に攻撃しようとしたら盗賊の2本の角の生えた酒呑童子が現れた。鬼頭の酒呑童子は和尚に、『おい！和尚！その人間どもおとなしくさせろ！今夜の酒のつまみのなますにしてくれるわ！』と言った。戸惑った和尚は、『そろそろ眠り薬の効果が現れるかと思えます』と言った。『なぜあの男ふたりは眠らぬ？』と聞いた。和尚は、『あの男ふたりはあとからやってきました』と答えた。身長2メートルで酒好きのぶっきら棒な酒呑童子は、『あの男二人やられたのか！』と言って和尚の首を右手で持ち上げて外へ投げ込んで崖の下に落ちていった。和尚は鳥たちの餌食となった。俺は酒呑童子に、『酷い仕打ちをするな！』と言ってスティーブンと一緒に酒呑童子に立ち向かっていった。酒呑童子は俺とスティーブンに、『わしのためならなんでもする仏の教えを誤った卑怯者だ！あの男ふたりまとめて血祭りにしてくれる』と言って俺たちを掴もうとした。俺は酒呑童子に手裏剣を投げて手裏剣が酒呑童子の頭と腕に突き刺さって手裏剣爆弾を投げて手裏剣爆弾が酒呑童子の胸に突き刺さって爆発した。酒呑童子は手裏剣爆弾が爆発してもびくともせず頭に腕に突き刺さった手裏剣を解き払って勇斗に突進して右手で俺の首を掴んだ。スティーブンは酒呑童子に右足でキックしたが、酒呑童子に右腕で払われた。俺のところに現れた悟は、荒魂雷遁（あらくれらいとん）の術で雷（いかづち）を手のひらから放って、酒呑童子の背なに直撃した。酒呑童子は俺の首を掴んだ右手から離して床に落とした。酒呑童子は悟に金棒を振り回して攻撃していった。鼠色の装束を装った悟は鞘から斬妖刀を抜いて酒呑童子の振り回して攻撃してくる金棒を避けていって、斬妖刀で攻撃していった。勇斗はすぐに悟を助けようとして酒呑童子に火炎火遁の術で火炎を放ってこっちに振り向かせて酒呑童子が向かってきた。俺は酒呑童子に火炎風車舞の術でぐるぐる回る炎を放って、酒呑童子を火達磨にした。悟は酒呑童子が燃えた炎を消して元に戻る時に後ろから酒呑童子の首を斬り裂いて頭を落とした。酒呑童子は倒れて闇雲に吸い込まれていった』と思い出した。そのとき地下牢に猩猩が現れた。猩猩は勇の頭に手を当て気になる人物を特定したら、不思議な空間に入っていった。不思議な空間から2035年アメリカニューヨークにタイムワープした。猩猩はスティーブンの住むアパートの部屋の扉をノックした。スティーブンは扉を開いて見たら毛むくじゃらなオラウータンが立っていたのでびっくりした。猩猩はスティーブンに、「ごめんください！わいは隠神刑部から送られてきた猩猩だ！悟を助けに江戸初期に行った勇斗が鬼たちに捕らわれた。助けに行ってほしいんだ！」と言った。スティーブンは、「申し訳ないけど今の俺は猫ちゃんを飼ってる。危ない真似をしたくない！」と言って扉の隙間からティムが顔を覗いた。猩猩は、「わかった！セントラルパークの中央の辺りの木の上にいる。気が変わったらきてくれ！明日の朝までいる」と言って離れた。翌朝起きたスティーブンはティムに、「絶対に帰ってくるから待っていてくれ！」と言って宇宙飛行士を辞めて動物愛護センターで働いてニューヨークに住むナンシー・エドワーズにもお願いしてティムを預けた。セントラルパークの中央辺り森林までやってきたスティーブンは、「オラウータンどこにいる！」と叫んだ。猩猩は、「おいらは猩猩だ！勇斗を助けに江戸初期まで行く気になったか？」と聞いた。スティーブンは、「助けに行きたいよ！ロスまで

助けに来てくれた恩返しをしたいんだ！ それに猫ちゃんを知り合いに預けてきた」と答えた。猩猩は、「わかった！」と言ってスティーブンと一緒に不思議な時空に入っていった。猩猩はスティーブンと一緒に江戸初期にやってきた。猩猩はスティーブンに、「まだまだ助けがいる」と言ってスティーブンの頭に手を当てて気になる人物を特定すると不思議な時空に入っていった。猩猩は明治初期の甲賀の里までやってきた。猩猩は渉がサイの武器を持った痩せ型で紫色の装束を装った鈴木晃（すずきひかる）とヌンチャクの武器を持った筋肉質で黄緑色の装束を装った池上修（いけがみおさむ）とトンファーの武器を持った身軽で橙色の装束を装った山河湊（やまかわみなど）とクナイの武器を持ったごっつい短髪で茶色の装束を装った渡辺登（わたなべのぼる）の四人衆に武器を使って稽古をしている最中に問いかけた。猩猩は渉に、「稽古中に失礼します。おいらは隠神刑部から送られてきた猩猩だ！ 悟を助けに江戸初期に行った勇斗が鬼たちに捕らわれた。助けに行ってもほしいんだ！」と言った。渉は、「徳川家康埋蔵金の在処でもわかるなら！」と言った。猩猩は、「家康に会えるかもしれない！」と言った。渉は、「四人衆も連れていってもいいか？」と聞いた。猩猩は、「それは沢山いるだけ助かる」と答えた。渉は、「みんなで江戸初期に行こう！」と言った。猩猩は、「わかった！」と言って渉が率いる甲賀盗賊五人衆と不思議な時空に入っていった。猩猩は渉が率いる甲賀盗賊五人衆と一緒に江戸初期にやってきた。猩猩は渉に、「もう少し助けがいる」と言って渉の頭に手を当てて気になる人物を特定すると不思議な時空に入っていった。猩猩は明治初期の伊賀の里にやってきた。猩猩は洗濯している愛と鈴木初音（すずきはつね）のところにやってきた。猩猩は愛に、「洗濯中に失礼します。おいらは隠神刑部から送られてきた猩猩だ！ 悟を助けに江戸初期に行った勇斗が鬼たちに捕らわれた。助けに行ってもほしいんだ！」と言った。愛は、「父上の相生泰三（そうじょうたいぞう）も一緒に連れていっていいですか！」と言った。猩猩は、「多ければ多いほどいいんだ！」と言った。愛は初音に、「初音さんは行かないで留守番をしてほしい！」と言った。初音は、「いいえ！ 私も行きます」と言っ。猩猩は、「わかった！」と言って泰三と愛と初音は不思議な時空に入っていった。猩猩は泰三と愛と初音と一緒に江戸初期にやってきた。地下牢に再び猩猩が現れた。猩猩は眠ってる勇斗に頭に手を当てて気になる人物を特定すると不思議な空間に入っていった。猩猩は明治初期の蝦夷国（札幌）の旭川の森の中で人狼の桐生舜（きりゅうしゅん）を探した。猩猩は舜に、「桐生さん！ どこにおりますか？」と聞いた。舜は、「ここだ！」と答えた。猩猩の辺りの地面に槍が突き刺さって木の上から舜が降りた立ってきた。猩猩は、「おいらは隠神刑部から送られてきた猩猩だ！ 先祖の悟を助けに江戸初期に行った勇斗が鬼たちに捕らわれた助けに行ってもほしい！」と言った。舜は、「勇のことか？」と聞いた。猩猩は、「こんな森でさまよいつけても仕方ないだろう！」と言った。舜は、「僕は坂本龍馬を殺めた男だ！ もう森をさまよわずに表に出れない！」と言った。猩猩は、「勇斗を助けに行ってくれたら争い事もない太平の世の江戸初期で森をさまよわず暮らせばいい」と言っ。舜は、「じゃあ暇つぶしに行ってもいい！」と言った。猩猩は、「わかった！」と言って舜と一緒に不思議な空間に入っていった。猩猩は舜と一緒に江戸初期にやってきた。猩猩はスティーブンと渉が率いる晃と修と湊と登の甲賀盗賊五人衆と泰三と愛と初音と舜に、「あの寺の地下牢に閉じ込められてる！ すぐに助けに行ってもほしい！」と言って寺の外に出て山の茂みに隠れた。スティー

ブンたちは寺にある地下牢へ向かった。地下牢近くに着いたスティーブンたちは、寺の地下牢に下りる階段の近くで黄鬼が護衛をしていた。スティーブンは黒猫の半面を被って黒い装束を装ってサイバーショットレーザーガンを手にしてブーメランを背負った。渉は緑色の装束を装って鎖鎌を両手に持った。晃はサイを両手に持った。修はヌンチャクを持った。湊はトンファーを両手に持った。登はクナイを両手に持った。泰三は黒い装束を装って薙刀を持った。愛は仮面舞踏会で使うような赤い仮面を被って、赤い装束を装って卍剣を両手に持った。初音は着物を装って脇差を持った。舜は袴を装って刀を持った。地下牢に下りていった黄鬼は地下牢にいる勇たちに、「おまえたちは今から獄門岩の刑に処されて沸騰した大釜に一人ずつ煮込んで喰べる」と言った。黄鬼は施錠した地下牢の扉の鍵を解いて扉を開いて、悟と勇と隠神刑部と忍者隊長と忍びの一人を地下牢から出した。黄鬼は勇たちを連れて階段を上ってきたところで黒鬼と緑鬼に出会った。黒鬼は黄鬼に、「黄鬼！何をやっている！さっさと済ましちゃおうぜ！鬼魔王様は昨日の夜の奈良で百鬼夜行を起こした。今日の夜の京の都で百鬼夜行を起こすらしい！」と言った。黄鬼は、「わしらは行かんでも良かったんか！」と言った。黒鬼は、「赤鬼と青鬼が行けばいい！わしらは留守番当番で明日の朝までに人間ども汁物と一緒に煮込めばいいんだ！」と言った。緑鬼は黄鬼に、「わしは腹の調子が悪いから早く人間を喰うて元気になりたい！」と言った。黄鬼は、「まずは茨木童子様に捧げる」と言っ。緑鬼は、「そうだ！鬼魔王様の後で茨木童子様に捧げてからだ！」と言った。黒鬼は緑鬼に、「わしらは人間を喰えるかわからない！」と言った。緑鬼は、「それはないだろう」と言っ。黒鬼は、「鬼魔王様は欲張りじゃない！わしらのぶんまで残してくれる」と言っ。黄鬼は、「おまえたち早くいけ！」と言って獄門岩があるところへ連れていった。黒鬼と黄鬼と緑鬼は勇たちを獄門岩に正座させようとしたときにどこかで隠れていたスティーブンたちが現れた。黒鬼はスティーブンに、「おい！誰だ！容赦せんぞ！」と言って黄鬼と緑鬼と一緒にスティーブンたちに向かっていった。黒鬼は斧でスティーブンと舜に攻撃していった。黄鬼は両刃のこぎりで渉が率いる甲賀盗賊五人衆に攻撃していった。緑鬼は薙刀で泰三と愛に攻撃していった。勇たちはその間に仏像のある広間に置かれた斬妖刀2本を取りに行った。勇斗たちは仏像のある広間に来たら、茨木童子が仏像のある広間で眠っていた。勇は悟に、「足は大丈夫なのか？」と聞いた。悟は、「足を休ませていたら良くなった！」と答えた。忍者隊長は悟に、「師匠！ここは忍びの一人と一緒に斬妖刀を取りに行って参ります！」と言っ。悟は、「わかった！気をつけろ！」と言っ。忍者隊長は、「こっそり近づいていきます」と言って忍びの一人と一緒に仏像のある広間に入っていった。目を覚まして立ち上がった茨木童子は左手で忍者隊長を掴んで右手で忍びの一人を掴んで払い投げた。勇と悟はその隙に斬妖刀を取りに行って自分の斬妖刀を手にとって斬妖刀を鞘から抜いて構えた。茨木童子は金砕棒を持って勇と悟に攻撃していった。黒鬼はスティーブンに斧を振り回して行って、スティーブンがサイバーショットレーザーガンを盾に防いでいった。黒鬼は舜に斧を振り回して行って、斧の刃が舜の背なに当たって舜が背なを擦り切った。黒鬼はスティーブンに斧を振って行って、スティーブンが防いで行って、斧が寺の柱に突き刺さって食い込んで抜けなくなった。舜が黒鬼の背なを刀で斬り裂いた。スティーブンは背なを斬り裂かれた黒鬼をサイバーショットレーザーガンで撃っていった。舜は黒鬼が地面に膝をつけたときに黒鬼の

首を刀で斬り裂いて黒鬼の頭を落とした。黒鬼は倒れて闇雲に吸い込まれていった。黄鬼は涉に両刃のこぎりを振り回していった、涉が鎖鎌で鎖についた六角の鉛を振り回して投げて、黄鬼が両刃のこぎりを持った右腕に鎖を絡めて身動きなくした。涉は黄鬼を鎌で斬り裂こうとしたら黄鬼が右腕に鎖を絡めた涉を振り回して払い投げた。黄鬼は右腕に絡めた鎖鎌を解き払ったら登が投げしてきたクナイを防いでいった、修がヌンチャクさばきで黄鬼の顔と頭を打ったが、修を払い投げた。黄鬼は湊に両刃のこぎりを振るっていったが、湊が両刃のこぎりをトンファーで防いでいった、トンファーの先で黄鬼の腹を3回打って顔を打ったが、湊を払い投げた。黄鬼は晃に両刃のこぎりを振るっていくが、晃がサイで防いでいった、黄鬼の腹にサイを突き刺したが、晃を払い投げた。涉は暴露山水遁の術で黄鬼の周辺を大爆発させて黄鬼が倒れた。舜は立ち上がろうとした黄鬼の首を斬り裂いて黄鬼の頭を落とした。黄鬼は倒れて闇雲に吸い込まれていった。舜は涉に、「鬼は首を斬り落とさなければ倒せない！」と言った。涉は、「わかった！」と言った。緑鬼は泰三に薙刀で斬り裂こうとしたが、泰三の薙刀でかわされた。泰三は薙刀の柄を回して石突で緑の顔を打って柄を回して穂で緑鬼の胸を斬り咲いた。緑鬼は薙刀を振り回していった、泰三が胸を擦り切った。泰三は地雷土遁の術で緑鬼の周辺に地雷を撒いて地雷爆破させて緑鬼が倒れた。愛は立ち上がってきた緑鬼の腹に卍剣2本を突き刺して離れて花ノ舞木遁の術で花枝の毒棘を放って緑鬼に突き刺して痺れさせて緑鬼が地面に膝をつけたときに、スティーブンが投げたブーメランが回転しながら、緑鬼の首を斬り裂いて緑鬼の頭を落とした。スティーブンは切れない手袋をはめた右手でブーメランを取った。緑鬼は倒れて闇雲に吸い込まれていった。茨木童子は勇と悟に金砕棒を振り回していった、勇と悟が避けていった、振るった金砕棒が柱などを破壊して寺が崩れかけた。勇と悟は寺から外に出ると茨木童子も寺から外に出た。勇と悟は茨木童子にふたり同時で攻撃した。勇は火炎噴火山の術で茨木童子を囲んだ地面から火炎弾を発した。悟は放電落雷の術で茨木童子に雲と地上の間で落雷させて電撃ショックを与えて茨木童子が倒れた。立ち上がってきた茨木童子は、あとから加わった隠神刑部に仙棍棒で打ち飛ばされた。悟は茨木童子の胸を袈裟斬りで斬り裂いて、茨木童子の背なを袈裟斬りで斬り裂いた。勇は茨木童子の横腹を横斬りで斬り裂いた。泰三は勇に、「鬼は頭を落とさないと倒せないぞ！」と言った。勇は、「知ってる」と言った。勇は地面に膝をつけた茨木童子の首を斬り裂いて茨木童子の頭を落とした。茨木童子は倒れて闇雲に吸い込まれていった。悟は勇に、「これで寺にいる鬼たちはすべて倒した。あとは京で起きる百鬼夜行を抑えないといけない！」と言った。勇は、「京に行こう！」と言った。忍者隊長は悟に、「忍者隊の応援を呼びに伊賀の里に戻ります！」と言った。悟は、「いっぺえ呼んできてくれ！」と言った。忍びの一人は悟に、「私も京に行きます！」と言った。悟は、「頼むぞ！」と言った。勇は黒猫の半面の男に、「もしかしたら、スティーブンじゃないか！」と問いかけた。黒猫の半面の男は、「バレていたか！」と言って黒猫の半面をはずした。勇斗は、「なんで黒猫の半面を被ってる？」と聞いた。長髪のスティーブンは、「酒吞童子を倒した者の一人として鬼たちに狙われるから」と答えた。勇斗は、「大丈夫！酒吞童子は生きていた。闇雲に吸い込まれていった後で鬼魔王となって魔界から戻ってきた！今日の夜、鬼魔王は京で百鬼夜行を起こそうとしてる」と言った。スティーブンは、「俺は地底世界に仲間を置き去りにしてしまった責任を感じて宇宙飛行士を辞めて



ニューヨークの安いアパートで暮らしていたら、忍びよってきた一匹の黒猫と出会って飼うようになった！ その黒猫は地底世界にあるねこの国の王子だった！ 今は知り合いの女に愛猫を預けてるけどニューヨークで俺の帰りを待ってるはずだ！ もしも俺が鬼たちと戦って倒れたら息のあるうちに、この赤いエンジェルストーンを俺の胸に当ててほしい！ 地底世界の命の泉で手にしたエンジェルストーンは愛猫の命を救ったんだ！」と言った。勇斗は、「わかった！」と言った。勇斗たちは寺から外に出て京へ向かっていった途中で使われてない城でひと休みした。悟は井戸から桶に入れた水に薬草を薬研（やげん）で潰した粉を入れて溶かしたものに足を膝までつけて足の痛みを和らげた。勇は悟に、「やっぱり痛みが取れてなかったのか！」と言った。悟は、「てやんでえこんなの大した事ねえ」と言った。勇斗たちは使われてない城から外に出て京へ向かっていった。

## 百鬼夜行と最後の夜

鬼魔王が率いる鬼たちは、道に棄てられた古道具が人間を恨んで妖となった化け物たちと一緒に夜の京（平安京）にやってきた。天狗を乗せた牛車と葛箱（かずらぼこ）に詰め込まれた妖と葛箱の上にいる鯰（ナマズ）と鋏（ハサミ）の妖と釜と蓋と古鈴を持った妖と経巻を乗せた妖の一行と烏の妖と着物を着た狐女と赤鬼が開けた古唐櫃から逃げ出した狼と黒犬と天秤を担いだ鍋の妖と赤いのっぺらぼうと蟻と麒麟と三つ目小僧と白龍の錫杖（しゃくじょう）の妖とお歯黒べったりの醜女と猿女の妖と黒布の妖を追う扇と如意（にょい）の妖と琵琶を弾く妖と烏兜の妖と青鬼と蜥蜴馬（トカゲウマ）に乗った草履と傘の妖と怨霊が宿る鬼と器物に宿る付喪神（つくもがみ）と白布を被った獣と天狗と蛸と蛙と大蛙と針鼠（ハリネズミ）と兎と猫と猿と白狐と白鷺の付喪神から鎧と兜と弓と太刀の鎧（あぶみ）の武具の妖と琵琶と琴と笛と太鼓と笙（しょう）の楽器の妖と鏡と灯台と火鉢の家具置物の妖と奇妙な形をした仏具の妖が京の人々を襲い始めた。遷都の京の都にたどり着いた勇斗たちは、忍びの一人から元の都の奈良（平城京）がほとんど壊滅状態になったことを知って次の標的地とする駿府に来るまでなんとしてもここを抑えなければならない使命があった。勇斗は初音に、「その脇差は妖刀だ！妖を斬り裂いて倒せる」と言った。初音は、「わかった！今回は参戦する！」と言った。舜は、「今日は満月の夜だ！」と言って手足が長くなって鼻と口が伸びて頭の上に耳が立ち上がって毛が伸びた黒い人狼となった。勇斗たちは京で忽（たちま）ち広がっていった百鬼夜行に突進していった。勇斗とスティーブンは天狗と牛車と葛箱に詰めた妖と葛箱の上にいる鯰と鋏の妖に攻撃していった。悟と泰三は釜と蓋の古鈴を持った妖と経巻を乗せた妖の一行集団と烏の妖と狐女に攻撃していった。黒い人狼は狼と黒犬と天秤を担いだ鍋の妖とのっぺらぼうと蟻と麒麟と三つ目小僧と白龍の錫杖に攻撃していった。愛と初音はお歯黒べったりと猿女の妖と黒布の妖を追う扇と如意の妖と琵琶を弾く妖と烏兜の妖に攻撃していった。渉が率いる甲賀盗賊五人衆は蜥蜴馬に乗った草履と傘の妖と怨霊が宿る鬼と器物に宿る付喪神と白布を被った獣と天狗に攻撃していった。あとから京の都に来た忍者隊は、蛸と蛙と大蛙と針鼠と兎と猫と猿と白狐と白鷺の付喪神と鎧と兜と弓と太刀の鎧の武具の妖と琵琶と琴と笛と笙の楽器の妖と鏡と灯台と火鉢の家具置物の妖と奇妙な形をした仏具の妖の攻撃していった。八百山狸の司令官の隠神刑部は狸の群れを呼び寄せて赤鬼と青鬼に飛びついていって、赤鬼と青鬼の悪ふざけな動きを止めた。勇斗は牛車から降りた天狗が振るってきた剣を斬妖刀でかわして天狗を横斬りで斬り裂いて倒して、葛箱に詰められた妖が黒い煙を発生しながら飛んで襲いかかってきたが、妖の顔を斬妖刀で斬り裂いて倒した。スティーブンは葛箱の上にいる鯰と鋏の妖が飛んで襲いかかってきたが、鯰をサイバーショットレーザーガンで撃って倒して肉を

切り裂こうとする鋏をサイバースョットレーザーガンで撃って倒した。悟は飛んで襲いかかる釜と蓋を蹴り飛ばして古鈴を持った妖が飛ばしてきた古鈴の付いた白と赤の紐を首に巻き付いて首を締めようとするが紐を斬妖刀で斬り裂いて紐を引っ張ってきた妖を斬妖刀で袈裟斬りで斬り裂いて倒した。泰三は経巻に乗った妖の一団が太い筆を持って攻撃してきたが、妖の一団を薙刀で突いて斬り裂いて倒した。泰三は飛んで襲いかかってきた鳥の妖の右翼を薙刀で斬り裂いて落として、飛べなくなった鳥の妖を薙刀で縦斬りで斬り裂いて倒した。悟は狐女の放ってきた毛針を斬妖刀で払ったが、左腕に毛針の一本が突き刺さって左腕から一本を抜き取った。悟は襲いかかる狐女に斬妖刀を構えていたら泰三が巨木突発の術で狐女の周りの地面から巨木を出現させて狐女を上突き飛ばした。悟は巨木を駆け上がって落ちてくる狐女を横斬りで斬り裂いて地面に落として倒した。黒い人狼は狼と黒犬に咬みつかれたが強靱な肉体で解き払って狼と黒犬を咬みついて倒した。黒い人狼は天秤を担いだ鍋の妖とのっぺらぼうと蟻と麒麟と三つ目小僧と白龍の錫杖に攻撃していくと、白龍の錫杖だけ残してどこかへ逃げていった。愛は目と鼻のないお歯黒べったりが口から出して噛みつこうと飛んできた入れ歯を卍剣で破壊したら逃げていくお歯黒べったりに2本の卍剣で背なを突いて倒した。初音は噛みつこうと掴んでくる猿女を演武舞の形を振る舞って脇差で斬り裂いて倒した。愛は黒布が黒い一反木綿（いったんもめん）と醜い獣に分裂して黒い一反木綿が覆い被ろうとしてきたが、2本の卍剣で突いてやぶって真二つに引き裂いて倒した。愛は醜い獣が襲いかかってきたが、花着色注入の術で白い花びらのバラの枝先が尖ったほうを投げて突き刺して、白い花びらのバラが赤いバラに変わって行って、バラ枝の毒棘から痺れが効いて動けなくなった醜い獣を2本の卍剣で突いて倒した。扇と如意の妖はどこかへ離れていった。琵琶を弾く妖は座ったまま動こうとしなかった。初音は鳥兜の妖が白龍の錫杖を持って攻撃してきたが、演武舞の形を振る舞ってかわした。初音は鳥兜の妖が白龍の錫杖で突いてきたが、鳥兜の妖を演武舞の形を振る舞って脇差で左に回って右に回って斬り裂いて倒した。涉は蜥蜴馬に乗った草履と傘の妖に鎖鎌で六角鉛のついた鎖を振り回して投げた。草履と傘は六角鉛が当たって飛んでいった。蜥蜴馬はどこへ去っていった。涉は首を絞めようとして襲いかかる怨霊が宿る鬼に晃が両手に持ったサイで突いて修がヌンチャクを振り回して顔と頭を打って湊が両手に持ったトンファーで腹と胸を打って登が両手に持ったクナイで腹と頭を刺して怨霊が宿る鬼を鎖鎌の鎌で斬り裂いて倒した。涉は器物に宿る付喪神に鎖鎌で六角鉛のついた鎖を振り回して投げた。器物に宿る付喪神は六角鉛が当たって割れて倒した。涉は白布を被った獣が一反木綿と醜い獣に分裂して一反木綿が覆い被ろうとしてきたが、鎖鎌の鎌で斬り裂いて倒した。涉は醜い獣が襲いかかってきたが、棍棒槍で突いて鎖鎌で斬り裂いて倒した。涉は天狗が剣を振るってきたが、鎖鎌の六角鉛のついた鎖を振り回して回して行って、天狗の剣を持った右腕に鎖を絡めて天狗を鎖鎌の鎌で斬り裂いて倒した。忍者隊は蛸と蛙と大蛙と針鼠と兎と猫と猿と白鷺の付喪神をどこかへ追い払って、鎧と兜と弓と太刀の鎧の武具の妖と琵琶と琴と笛と笙の楽器の妖と鏡と灯台と火鉢の家具置物の妖と奇妙な形をした武具の妖に棒手裏剣を投げて撃退した。赤鬼と青鬼は狸の群れを解き払って行って、隠神刑部が八百山狸の大群を狸の里に戻していった。赤鬼は青鬼に、「人間どもめ！よくもやってくれたな！都と朝廷を制して駿府の町と家康を制すればこの国は鬼たちの支配下となるのだ！

鬼魔王が許さないぞ！」と言った。青鬼は、「そうだ！ おまえたちは許さん！ ひとり残さずに喰いちぎってやる！」と言った。赤鬼は勇斗に金棒を振り回してしていったが、スティーンにサイバーショットレーザーガンで何発も撃たれて斬妖刀で袈裟斬りで斬り裂かれて倒れた。立ち上がった赤鬼は隠神刑部に仙棍棒で打たれて飛んでいった。立ち上がろうとした赤鬼は斬妖刀で首を斬ろうとしてくる勇斗を金棒で打って振り飛ばした。赤鬼は勇斗に金棒でトドメを刺そうと金棒を振り上げたときに勇斗が悪魔を滅ぼすという魔滅からきた豆で邪気を払う力が宿る穀物の豆を顔に巻いて斬妖刀で腹を斬り裂いた。勇斗は地面に膝をついた赤鬼の首を斬り裂いて赤鬼の頭を落とした。赤鬼は倒れて闇雲に吸い込まれていった。青鬼はサイバーショットレーザーガンが弾切れのスティーンに、「おまえは酒吞童子を悟ともう一人の忍者と一緒に倒したアメリカ人だろう！ おまえも年をくってない！」と言って建物の塀につけて刺股で首を持ち上げて黒猫の半面をはずして落とした。スティーンは、「そうだったらなんなんだ！」と言った。青鬼は刺股で持ち上げたスティーンを払って刺股の棒の反対側の槍でスティーンの胸を刺した。渉は青鬼の顔に鎖鎌の六角鉛のついた鎖を投げて六角鉛を当てて鎖鎌で胸を斬り裂いた。愛は青鬼に2本の卍剣で腹を突いて離れた。泰三は青鬼の背なを斬り裂いた。勇斗は地面に膝をついた青鬼の首を斬り裂いて青鬼の頭を落とした。青鬼は倒れて闇雲に吸い込まれていった。勇はスティーンのところに行って、「大丈夫か！」と言った。スティーンは、「早く！ このエンジェルストーンを俺の胸の上に置いてくれ！」と言った。勇斗は、「わかった！」と言ってスティーンの胸の上に赤いエンジェルストーンを置いた。するとスティーンは胸の刺し傷が治って体調も回復した。スティーンは、「よかった！ これで元に戻る！」と言った。勇斗は、「まだ戦いは終わってない！ 鬼魔王を倒さなければならない！」と言った。鬼魔王は生きてまま闇雲に吸い込まれた。スティーンは、「そうだ！ やつがいた！ あいつはどこにいる」と言った。勇斗は、「生きてるのに闇雲に吸い込まれた！」と言った。闇雲はバックベアードとなって勇に、「鬼魔王にエネルギーを供給してるのだ！」と言った。スティーンは勇に、「ニューヨークのビルの屋上にいる人たちがビックベアードの目を見たら落ちていった。日本から現れたのか！」と言った。勇斗は、「ここでとどめればアメリカまで来ないぞ！」と言った。スティーンは、「そうだな！ 放射線を発したようなまるくて巨大な黒い物体のバックベアードは夕方のビルに現れて人々を中央の大きな目玉で落としていったらしい！」と言った。勇斗は、「だけどビルの上じゃない！」と言った。ビックベアードは勇斗たちに稲妻ビームを放っていった。勇斗たちは稲妻ビームを避けていった。ビックベアードは駿府へ向かっていった。勇斗は口寄せの術で大鷹を呼び寄せてスティーンと初音と一緒に大鷹に乗って、泰三は口寄せの術で大鷹を呼び寄せて愛と一緒に大鷹に乗って渉が率いる甲賀盗賊五人衆は一人ずつ大凧に乗って駿府までへビックベアードを追っていった。隠神刑部は火災が起きた京に雨を降らした。京に雷が落ちて雷獣が現れた。隠神刑部は悟に、「しまった！ 私が雨を降らしたために、あんな化け物が現れた」と言った。悟は、「あいつぁ雷様が送り込んだんであなたが雨を降らしたからじゃねえ！」と言った。悟は、「昔、鶴（ぬえ）を退治した源頼政と鎌倉幕府の源頼朝がいた。鶴は雷獣の事だ！ 幻獣と異獣と雷獣がいるらしい！」と言った。隠神刑部は、「私も妖だけど人間に害など及ぼさない！ 悟さんには悪い人間から山狸を救ってもらえた！ お礼として一

緒に戦ってます！」と言った。悟は、「ここであの雷獣と最後の戦いに挑むか！」と言った。隠神刑部は、「挑みます」と言った。悟と隠神刑部は暴れる雷獣のところへ向かっていった。稲妻を放出している雷獣に近づくことさえできない悟と隠神刑部は遠隔攻撃する術しか考えられなかった。悟は雷獣に放電落雷の術で雲と地上の間で落雷させて雷獣に電撃ショックを与えたが稲妻を放出した雷獣にはびくともしなかった。そこに走る馬に乗って笠懸（かさがけ）を訓練してきた若君（わかぎみ）の頼朝に似た武士の助っ人が現れた。弓矢を射る頼朝に似た武士は雷獣に弓で矢を放って行って、雷獣の左目と脇腹に矢を刺した。怒った雷獣は稲妻を放出して頼朝に似た武士に向かっていった。また鬼退治をする朝廷に仕えた国家公務員の陰陽師の阿部春明（あべはるあき）の助っ人が現れた。春明は頼朝に似た武士に、「この世の者じゃない化け物が現れたのか！」と言って北斗七星の反閤（へんぱい）と呪術で北東の鬼門のほうへ追いやった。頼朝に似た武士は無でも何も答えなかった。春明は頼朝に似た武士を南南東の恵方である福を宿る歳徳神のいる縁起の良い場所に移した。頼朝に似た武士は馬を走らせて銀霊となって姿を消していった。頼朝は本物だった。春明は、「あの化け物はあそこの建物に入り込んだ！」と言って雷獣のいる建物へ向かっていった。雷獣のいる建物に着いた春明は、呪術で雷獣の放出した稲妻を解いて雷獣を焼き払おうとして力尽きたときに人狼から戻った舜が鯉口を切って抜刀して物を破壊する威力のある水のように水平に雷獣を斬り裂いて血振りして納刀した。雷獣は倒れて燃えて灰となって消えていった。春明は舜に、「季節の変わり目には邪気が生じるから目に見えない存在の隠と目に見えない邪気の陰が災いをもたらす！だが鬼たちははっきりと姿を現した」と言った。舜は、「魔界から送られてきた鬼たちだからだろう！」と言った。悟は春明に、「陰陽師！助けてもろうてかたじけない！昔、平安京で疫病患者1600人いたが鬼の仕業とっていらしい！」と言った。春明は、「鬼の仕業でしょう！」と言って京から離れていった。炎に逃げ惑う妖と鬼に追われる妖の祭礼行列が消えて雨が止んで上から降りてきた夜明けの朝陽が見えた。疫病を改善する神のアマビエとアマビエが現れて京の人々を安心させた。悟と隠神刑部と舜は京の北から京の南まで歩いていった途中で中央付近の一条戻橋に着いた。悟は隠神刑部に、「昔、茨木童子と武家の源頼光と家臣の頼光四天王が羅正門とこの一条戻橋で戦ったんだ！」と言った。隠神刑部は、「茨木童子は何度も生まれ変わって現れたみたいですね！」と言った。悟は、「そうだ！ビックベアードを倒さなければならない！」と言った。舜は悟に、「捻（ひね）くれ者の天邪鬼（あまのじゃく）たちを倒せて良かったじゃないですか？」と言った。悟は、「おうよ！早く駿府へ行きやしょう！」と言った。舜は、「よっしゃがってんだ！」と言った。悟と隠神刑部と舜は一条戻橋を渡った後で京で托鉢（たくはつ）をする僧侶たちいる道を歩いて京の南に着いた。悟は口寄せの術で大鷲を呼び寄せて隠神刑部と悟と一緒に大鷲に乗って京を離れて駿府へ向かっていった。陽の上がった朝に駿府の人々は活動を始めて駿府の町に人々がうごめいていた。駿府にたどり着いたビックベアードは闇雲となって鬼魔王と天魔を出した。2本の角が生えたどくろを頭から鼻に被って目が赤く光った鬼魔王は、人間の血の匂いを嗅ぎつけて民家に入ってまだ眠っている人間を襲って喰べ始めた。大和の大蛇のような第六天魔王である波旬（はじゅん）の天魔は駿府の町に舞い降り立った。本能寺の変で燃えた寺から姿を消した織田信長となった。信長は波旬となって空を舞いながら、駿府の町

を歩いてる人々に火炎を放っていった。駿府にたどり着いた勇斗たちは、人々が逃げ惑う駿府の町に勇斗たちを乗せた大鷹が降り立った。勇斗たちは人々を駿府城のほうへ避難させていった。鬼魔王は老婆に、「そんな姥（うば）にはようがないわ！」と言って跳ね除けた。鬼魔王は小娘に、「そっちの女子がいい！」と言って小娘を捕まえて喰べようとしたが、そのときに現れた勇斗に斬妖刀で背なを斬りつけられて小娘から手を離した。怒った鬼魔王は突拍子もない勇斗に、「またわれの邪魔しよって許さん！」と言った。勇斗は、「人間を喰べるなんて神への冒瀆（ぼうとく）に過ぎない！ おまえの最後を見届けてやる！」と言った。鬼魔王は、「わっはっは！ ほざくな！ われは鬼神の修羅たちがいる」と言って修羅たちを呼び寄せた。勇斗は刀で攻撃してくる闇の修羅たちを斬妖刀で斬り裂いていった。鬼魔王はいくらでも現れてくる闇の修羅たちと斬り合ってる最中にどこかへ逃してしまった。うっとうしい闇の修羅たちと戦ってる勇斗は、力尽き始めたときに泰三と愛と初音と渉が率いる甲賀盗賊五人衆が戦いに加わった。泰三は修羅たちを薙刀で斬り裂いて突いていった。愛は修羅たちを両手2本の卍剣で突いて突いていった。初音は修羅たちを演武舞の形を振る舞い脇差で斬り裂いた。晃は修羅たちをサイで突いていった。湊は修羅たちをトンファー腹を打って顔を殴っていった。修は修羅たちをヌンチャクで顔を殴って頭を打っていった。登は修羅たちクナイで刺して斬っていった。渉は四人衆が打ちのめした修羅たちを鎖鎌の鎌で斬り裂いていった。スティーブンは修羅たちに投げたブーメランが回転しながら、修羅たちを斬り裂いていった。スティーブンは切れない手袋をはめた右手でブーメランを取った。勇斗はスティーブんに、「そのブーメランどこで手にした？」と聞いた。スティーブンは、「渉からだ！ 未来のアメリカにやってきたときにブーメランと黒猫の反面をもらった！」と答えた。勇斗は、「渉のやつ！ いいところあるな！ それで忍者になったのか？」と聞いた。スティーブンは、「俺は忍者もどきだ！ 忍術を使えない」と答えた。勇斗は、「そうか！ やつらは油断ならない！ この戦いは降りろ！ エンジェルストーンは何度も使えるか分からないから猫ちゃんに会えなくなるぞ！」と言った。スティーブンは、「そうだな！ 俺はじゃあ！ まだ民家にいる人々を避難させていくよ！」と言った。勇斗は、「わかった！ そのほうがいい！」と言った。スティーブンは、「最後にアメリカのボスのビックベアードを倒してくれよ！ そしたらアメリカにやってこないだろうからな！」と言った。勇斗は、「任してくれ！ おまえの危ないときは必ず助けにいく！」と言った。スティーブンは、「頼むぞ！」と言った。老婆は勇斗たちに、「助けてくれてすまねえな！ どうかこの戦に勝っておくれ！ ご武運を！」と言った。勇斗は、「どうも！」と言った。小娘は勇斗たちに、「ありがとう！ あなたたちは私の命の恩人だからどうかご武運を！」と言った。勇斗は、「ちょっとお手荒な真似をした！」と言った。勇斗は仲間たちに、「おい！ もたもたしてられないぞ！ やつらを探しに行くぞ！」と言って仲間たちと一緒に強敵の鬼魔王と最強の第六天魔王である波旬を探しに行った。駿府にたどり着いた悟たちは、駿府の町に悟たちを乗せた大鷹が降り立った。人間の匂いを嗅ぎつけた波旬は民家でまだ寝ている人々を探し出して舌でしゃぶりついて生血を吸って無惨なカラカラのミイラにしていった。鬼魔王は駿府の町の道端で歩いてる逃げ遅れて親と逸（はぐ）れた幼女を見つけた。鬼魔王は幼女を捕まえて喰べようとしたが、そのときに現れた悟に斬妖刀で背なを刺されて幼女から手を離した。悟は鬼魔王の背なから斬妖刀を抜いた。鬼魔王は悟に、「悟だ

な！ おまえのお陰で長いこと魔界をさまよいつけていた！ 罽（なぶ）り殺しにしてやる！」と言った。悟は、「今日で二度と生き返れねえように魔界ごと滅ぼしてやる！」と言った。鬼魔王は、「今のわれは酒呑童子じゃなくて鬼魔王だ！ 魔界から蘇った以上そんな刃でわれを倒せない」と言った。荒くれ者の鬼魔王は悟に手のひらから起こした手鞠（てまり）のような火の玉を放って火の玉が直撃した悟が吹き飛ばされた。鬼魔王はうつ伏せた悟を起こして顔を殴って腹を殴って払い投げた。そのときにやってきた隠神刑部は鬼魔王に仙棍棒で打ち飛ばそうと打ったが、びくともせずに隠神刑部を払い投げられた。そのときにやってきた舜は鬼魔王に刀で斬り裂いていったが、払い投げられた。勇斗たちは鬼魔王と戦ってる悟たちを見て助けに向かった。駆け付けてきた勇斗たちは歯が立たない鬼魔王に攻撃をしていった。鬼魔王は勇斗たちに手のひらから起こした手鞠のようなファイヤーボール（火の玉）を放っていった。勇斗たちは避けていって、瞬間移動の術で他の場所に移った。勇斗は初音だけ取り残されたので鬼魔王のいるところへ助けに向かった。鬼魔王は初音に、「これは大層なべっぴんじゃのう！ 喰べたら美味そうじゃ！」と言って初音を捕まえて喰べようとしたが、そのときに現れた勇に背なを斬り裂かれて初音を手から離れた。怒った鬼魔王は勇斗に、「またおまえか！ よく見ればあのときに悟と組んで刃を向けたやつだ！ 今度こそ許さん！ 悟と共にお陀仏だ！」と言った。勇斗は、「横暴なやり方だな！」と言った。鬼魔王は黒い煙を発して宙を回って勇斗に襲いかかっていった。勇斗は鬼魔王に掴まれそうになって斬妖刀で斬り裂いては避けていったが、びくともしなかった。舜と隠神刑部はうつ伏せて倒れた悟を起こした。隠神刑部は悟に、「悟さん！ 大丈夫ですか！」と言った。悟は、「大丈夫だ！ 軽い甲冑の鎖帷子（くさりかたびら）を身につけていたから打撃を半減できた。忘れていた！ 平安後期に頼光が酒呑童子を殺めた童子切りという刀！ これを勇に渡せ！」と言った。隠神刑部は、「わかりました」と言った。勇斗は力尽きて鬼魔王に掴まれそうになった。すぐに隠神刑部は勇斗に、「勇さん！ この刀を使ってくれと悟さんにいわれました！」と言って童子切りの刀を投げた。勇斗は、「わかった！ ありがとう！」と言って駆けって童子切りの刀を受け取った。勇斗は斬妖刀を鞘に納めて振り返った鬼魔王に掴まれそうになったときに童子切りの刀を抜いて鬼魔王を斬り裂いたが、少しだけダメージを与えて避けた。あまり効果なかった童子切りの刀を握ったままの勇斗は、どこかに鬼魔王の弱点がないか探っていた。勇斗は鬼魔王が頭から鼻に被っている2本の角の生えた鬼のどくろを鬼魔王から解き払えば酒呑童子に戻るんじゃないかと思った。勇斗は仮分身の術で5体となって2体と3体に分かれて鬼魔王を挟み込んだ。鬼魔王はどれが勇斗なのか分からない状態で適当に襲いかかっていった。3体の勇斗は童子切りの刀でどこからでも鬼魔王を斬り裂いていって、鬼魔王に掴まれたら消えていった。2体の勇斗は童子切りの刀でどこからでも鬼魔王を斬り裂いていって、鬼魔王に一体の勇斗が掴まれたら消えて、ホンモノの勇斗が掴まれそうになったときに童子切りの刀で斬り裂いて避けた。勇斗は鬼魔王に火炎烈火の術でもものすごい勢いの炎を放って火炎昇竜派で竜の形をした炎を直撃させて火達磨にしてやろうとしたが効果なかった。そのときに現れた護法童子が鬼魔王に仏法と法輪を放った。そして太陽が鬼魔王に火炎を吹いた。勇斗はダメージを食らった鬼魔王が地面に膝をついたときに、鬼魔王の2本の角を持ってどくろを解き払った。鬼魔王は苦しみもがいて酒呑童子に戻っていった。酒呑童子は勇斗に、

「これでやられちゃすべてが水の泡じゃ！」と言った。勇斗は、「すべてが終われば後のお祭りだ！これで対等の力になった！」と言った。狂った酒呑童子は勇斗に金棒を振っていったが、かわされていった。勇斗は躊躇なく金棒を振るい回す酒呑童子を雷神音遁の術で轟音を響かせて超音波で跳ね返した。勇斗は立ち上がった酒呑童子を童子切りの刀を握って、袈裟斬りで右から斬って左から斬って突いて刺した。背負った童子切りの刀を抜いた勇斗は酒呑童子が地面に膝をついたときに酒呑童子の首を斬り裂いて頭を落とした。酒呑童子は倒れて闇雲に吸い込まれていった。勇斗は、「闇雲の正体であるビックベアードを倒さないと呑童子と茨木童子は30年ぐらいで生き返って同じことを繰り返すことになる。やつらの思う壺にさせない！早いとこ魔界を滅ぼさなきゃ！」と呟いた。護法童子はいつの間にかどこかへ姿を消していた。波旬は民家の中へ侵入していった。親が子供を置いて逃げて親に見捨てられた子供たちを助けようとしたスティーブンを見つけた。波旬はスティーブンに舌を伸ばして血を吸い取ろうとしたら、忍びの一人が現れて忍者刀で波旬の舌を斬り落とそうとしてしくじった。忍びの一人はスティーブンに、「急いで子供たちと一緒に逃げてください！」と言って身代わりになった。波旬は忍びの一人に舌を伸ばして舌の先から突き出したストローのようなもので忍びの一人の首に突き刺して血を吸い込んでいった、カラカラのミイラにした。スティーブンと子供たちは、命を張って犠牲になった忍びの一人のお陰で命乞いをして、駿府城へ向かっていった。波旬は走って駿府城へ向かっていったスティーブンと子供たちを追っていった。スティーブンと子供たちに追いついてきた波旬は、スティーブンに舌を伸ばしたときに勇斗が現れて斬妖刀で波旬の舌を斬り落とした。波旬は舌から血を流して苦しみもがいて信長に戻った。

信長は舌を斬り落とされて口から血を流しながら長く伸ばしたり伸縮できる6メートルもある長柄槍（ながえやり）を取り出した。波旬は舌の血を止めて舌を再生させて攻めてきた勇斗たちに長柄槍を振り回して槍で頭を打って突いていこうとしたが、避けられていった。そのときに関ヶ原の戦いにも参加した剣豪の宮本武蔵が現れた。二刀流の武蔵は信長に、「見参！」と言って刀を両手に持った。武蔵は両手に持った刀で信長が突いてしてくる長柄槍をかわしていった、どんどん6メートルもある長柄槍から信長に近づいていった、信長の胸を袈裟斬りで斬り裂いて背なを斬り裂いた。信長は地面に膝をつけて長柄槍を捨てた。武蔵は、「成敗！」と言って一本の刀を捨てて刀で信長の首を斬ろうとしたら信長に刀を持った腕を取られて腹を殴られて顔にアッパーパンチを食らって飛んで仰向けに倒れて刀を手放した。信長は、「武蔵よ！生ける屍となれ！」と言って抜いた刀で武蔵の胸を刺そうとしたときに、そのときにやってきた斬妖刀を振るってきた勇斗と剣の斬り合いになって勇斗に横腹を横斬りで斬り裂かれて胸を燕返しで斬り裂かれた。勇斗は武蔵に、「大丈夫ですか！」と問いかけて武蔵を起こした。武蔵は、「大丈夫だ！」と言って立ち上がった。勇斗は地面に膝をついた信長が立ち上がり始めて武蔵をどこかへ避難させた。信長は胸と横腹と背なの傷口が治ってきたら、波旬となって舞い上がった。悟たちは、「いざ！参る！」と言って波旬へ向かっていった。波旬は悟たちに火炎を放っていったら、悟たちが避けていった。勇斗は武蔵に、「ありがとう！信長を抑えれた！」と言った。武蔵は、「俺のことはほっといてくれ！俺はただ信長の長柄槍で勝負してみたただけだ！」と言った。勇斗は、「そうですか！俺は波旬と最後を



戦いがあります！」と言った。武蔵は、「わかった！ やいつは危険な妖だ！ 気をつけて参られ！」と言った。勇斗は、「どうも！」と言って波旬へ向かっていった。勇斗は悟たちと合流して火炎を放ってくる狂暴（きょうぼう）な波旬に立ち向かった。勇斗と悟は波旬が放った火炎を避けていって、斬妖刀で波旬の胴体を斬り裂いていった。隠神刑部は波旬が放った火炎を避けていって、仙棍棒で波旬の横顔を打った。舜は波旬が放った火炎を避けていって、刀で波旬の胴体を斬り裂いていった。勇斗は悟に、「俺が毘沙門岳の山寺で戦った第六天魔王と訳が違う！」と言った。悟は、「あの第六天魔王の正体が信長だったからよ武力が強いのだろう！」と言った。振り返ってきた波旬は勇斗と悟と隠神刑部と舜に火炎を放そうとしたときに近くの真言宗のお寺で僧侶たちが座禅（ざぜん）をして、お坊さんが木魚（もくぎょ）を叩きながら般若心経のお経を唱えた声が聞こえてくると、急に波旬がおとなしくなった。悟は勇斗に、「今がチャンスだ！」と言って34年の間で極意を編み出した風神雲遁の術で嵐を起こして波旬のところに雲からいくつかの雷を落として爆風で波旬を吹き飛ばした。勇斗は火炎疾風の術で波旬にもものすごい勢いの炎の竜巻を起こして波旬を飲み込んだ。地面に落下した波旬は火達磨になって苦しみがいて勇斗に火炎を放そうとしたが、胴体を斬妖刀で斬り裂かれた。悟は斬妖刀で勇斗にまた火炎を放そうとして近づいてきたときに、波旬の首を斬り裂いて頭を落とす。波旬は倒れて闇雲に吸い込まれていった。闇雲はビックベアードとなって勇斗たちに稲妻ビームを放っていったら、勇斗たちが避けていった。逃げようとしたビックベアードは、土に埋もれた巨大な化け物が土から立ち上がってきて、渉が率いる甲賀盗賊五人衆が地面の陥没した穴に落ちそうになって五人衆で手を取り合って助けた。

巨大な化け物のがしゃどくろは逃げようとするビックベアードを掴んでビックベアードに稲妻ビームを放されながらビックベアードを掴んだまま地面にうつ伏せに倒れた。そこに現れた3匹の鎌鼬は爪のような鎌でビックベアードの目玉を斬り裂いていった。そこに現れた牛と蜘蛛を一緒にしたような牛鬼（ぎゅうき）はビックベアードが逃げないように口から糸を放ってビックベアードを固定した。

黄色い目がいくつもある百目は小百目を連れて逃げていった。尻尾が9本もある九尾（きゅうび）は民家の屋根を伝って逃げていった。大きな三毛猫の化け猫は民家を沿って山のほうへ逃げていった。勇斗は斬妖刀でビックベアードの中央の目玉に突き刺して斬妖刀を抜いた。ビックベアードは苦しみがいて破滅した。勇斗たちはビックベアードを倒したことに喜んでいたが、また空で闇雲を作って新しい別の魔界を起こした。闇雲はビックベアードとなってどこかへ消えていった。渉は勇斗に、「もう少して生き埋めにされる場所だったよ！」と言った。勇斗は、「平成時代に現れた物の怪に助けられたんだ！ 感謝しないといけない！」と言った。がしゃどくろと3匹の鎌鼬と牛鬼はどこかへ消えていった。悟は勇斗に、「この駿府の町に住み着いていた妖たちだろう！ ビックベアードたちに自分たちの住処を邪魔されて怒り狂って現れたのだ！」と言った。勇斗は、「あの妖たちはビックベアードにまた新しく作った魔界へ招かれて邪悪化して未来の大和に現れるかもしれないですね！」と言った。悟は、「勇たちが来てくれなかったら、鬼たちに酷い仕打ちを受けるところだった！」と言った。勇斗は、「あのときも童子切りの刀で酒呑童子の首を斬り裂いたのか？」と聞いた。悟は、「そうだ！」と答えた。勇斗は、「この童子切りの刀はどこで手にした？」と聞いた。悟は、「こいつぁ頼光から家康に渡っ

て家康から秀康に渡って秀康から拙者にとこころに来た」と答えた。勇斗は、「そうだったのか！昔から相生家はすごいな！俺たちは明治時代からやってきたんだ！」と言った。悟は、「江戸時代はどうなりやがった？」と聞いた。勇斗は、「江戸幕府は特に戦もなく260年も続いて滅んだ！」と答えた。悟は、「なんだって！江戸幕府が滅んだ！幕府にどんな事が起きた？」と聞いた。勇斗は、「今の幕府ではこの国が他所の国に滅ぼされと思った志士たちが立ち上がって幕府崩壊に導いた」と答えた。悟は、「そうなのか！けどももう当分は邪悪なる者は現れねえ！」と言った。勇斗は、「そうだと思う！江戸時代は平和だったと聞いている。俺たちは幕末の激動の時代になる前に生まれた！」と言った。悟は、「そいつぁご苦労だったな！」と言った。勇斗は、「近代化社会の明治時代だから他所の国に負けない建国造りしてる」よ言った。勇斗は僧侶たちに、「お経を唱えてくださりありがとうございます」と言っただ。僧侶の一人は、「真言宗の弘法大使（こうぼうたいし）である空海が奇特な真言密教を伝えた。このお経は霊的なものと妖と災いなどを抑える効果があるでしょう！」と言った。僧侶たちはお寺に戻っていった。勇斗は武蔵のいた場所に行ってみたが、もうどこかへいなくなっていた。勇斗は泰三と愛と初音と涉たちに、「あとから来てくれてありがとう！本当に助かったよ！」と言った。隠神刑部は悟に、「山狸を悪人から助けてくれた恩返しができて良かった！私は山狸の里に戻ります！」と言った。悟は、「あなたのお陰で無事にいられた！恩返しをしてえのはこっちだ！また俺のところ遊びに来てくれ！なんか恩返しするからよお！」と言った。隠神刑部は、「ありがとうございます」と言って山狸の里に戻っていった。勇斗は全員に、「スティーブンが駿府城で待っているからいこう！」と言って駿府城へ向かっていった。駿府城にたどり着いた勇斗たちは駿府城の広場で人混みの中にいるスティーブンを探していった。スティーブンは子供たちに、「君たちの親はどこにいる？」と聞いた。子供たちは、「あそこ！」と言って指を刺した親のところに行った。スティーブンは子供たちの母親に、「この子たちが家の中に取り残されてました」と言った。子供たちの母親は、「源次郎！喜三郎！小梅！どこにいたの？」と聞いた。子供たちは、「押し入れ！」と答えた。子供たちの母親はスティーブンに、「ありがとうございます！」と言って子供たちを父親のところへ連れていった。勇斗は人混みからスティーブンを見つけた。勇斗はスティーブンに、「無事だったかスティーブン！」と言った。スティーブンは、「波旬にカラカラのミイラにされるどころだったけど、忍びの一人に助けられたよ！俺の身代わりになってくれた！」と言った。勇斗は、「それは残念だったけど伊賀の忍者にそんな勇敢な忍びがいたなんて誇りが持てるよ！」と言った。スティーブンは、「あのときは救われた！俺のなかで鬼は和太鼓を持って虎柄のパンツを履いてるイメージだったけど着物を着ていた」と言った。勇斗は、「そうだよな！鬼に金棒と2本の角だけは当たっていたけどな！」と言った。スティーブンは、「そうだな！また悟に会えて良かったよ！」と言った。勇斗は、「そうだ！俺にとって曾曾曾曾祖父さんだからな！あのときの悟はまだ俺たちと同じ若い二十代だった、あれから34年後の還暦だ！」と言った。スティーブンは、「悟は老けたな！」と言った。勇斗は、「俺は与那国島の旅から帰ってきた後ですぐに時空転送の門をくぐって明治時代に帰還していた」と言った。スティーブンは、「明治時代に行ってみたいな！」と言った。勇斗は、「俺は未来のアメリカのニューヨークへ行って、猫ちゃんに会いたいんだ！」と言った。スティーブンは、「でも俺だけは別

の時間軸から来た。俺と勇斗じゃあ生きる次元が違う！ お互いに未来人と過去人だからもう会わないほうがいい！」と言った。見損なった顔した勇斗は、「そんな寂しいこというな！ 俺は時空転送の門をくぐったら、ロスにたどり着くだろうけど飛行機に乗ってニューヨークへ行くよ！」と言った。スティーブンは、「そこまでしなくても！」と言った。勇斗は、「猫に会わないでいたら忘れらんじゃないか！」と聞いた。スティーブンは、「猫は飼い主と2年ぐらい離れていても匂いと声で覚えている」と言った。勇斗は、「そうか！ 猫は人間よりも4倍の速さで時間が進んでいると思うと、一緒に入れる時間を大切にしないといけないんだ！」と言った。スティーブンは、「時間は人間が決めているものだ！ 猫は腎臓がきれいな状態なら30歳ぐらい長生きできる」と言った。勇斗は、「そうなのか！」と言った。スティーブンは、「地底世界のねこの王国から来た猫の王子なんてリアルに喋る猫なんだ！」と言った。勇斗は、「すごい猫そうだ！ ますます会ってみたくなったよ！」と言った。スティーブンは、「じゃあいつかニューヨークに来ることを楽しみにしとく！」と言った。勇斗は、「そうだ！ 京の都はワシントンD.C.で駿府はニューヨークみたいなものらしい！ 廃藩置県で明治後期から三河国のと遠江国と駿府のある駿河国が静岡になる！」と言った。スティーブンは、「そうか！ もの知りだな！」と言った。勇斗は、「平成時代では日本史の教師をしていたから！」と言った。スティーブンは、「そうなのか！」と言った。勇斗は、「あともう一つ！ 久能山東照宮を造られるときに職人が集まって、そのうちに木製からプラスチック製の職人が集まってプラモデルの産地になる！」と言った。スティーブンは、「そうだったのか！」と言った。渉はスティーブンと勇斗を見つけた。渉はスティーブンに、「ブーメランは使い慣れた？」と聞いた。スティーブンは、「ようやくブーメランを扱えるようになった！」と答えた。勇斗は渉に、「このブーメランは妖を倒せる効果あるのか！」と聞いた。渉は、「妖刀と同じ効果だ！ 明治時代で真言宗のお寺の僧侶が般若波羅蜜多と刻んだブーメランを僧侶たちに般若心経を唱えてもらってきた！ ついでに般若波羅蜜多と刻まれた棍棒槍と刃のないサイとトンファーとヌンチャクとクナイを般若心経を唱えてもらったよ！」と言った。勇斗は、「そうなんだ！」と言った。伊賀の忍者隊は甲賀の忍者隊を連れてやってきた。忍者隊長は悟に、「師匠！ 遅くなりました！ 京まで沢山の忍者隊を連れて駆け足でいったのですが、夜明けまで間に合わずに、駿府まで駆け足でいった途中で山から羽衣の術で空を飛んできました」と言った。悟は、「伊賀と甲賀の忍者隊で駿府の町の人々の手助けをしよう！」と言った。伊賀と甲賀の忍者隊は駿府の町に転がった遺体運びと一緒に残骸とカラカラのミイラの処理をした。黒い装束を着た伊賀と甲賀の忍者隊は黒い頭巾をはずして駿府の町の人々に声がけをして民家に送り返していった。忍者隊長は、「終わりました」と言った。悟は、「どうも！」と言った。甲賀の忍者隊長の代わりにやってきたくノ一忍者の葵（あおい）が勇斗たちのところに現れた。葵は悟に、「私は甲賀の忍び葵と申す！ もう無事に駿府の町の人々を民家に送り返しました」と言った。悟は、「ありがとう！」と言った。勇斗は葵に、「伊賀と甲賀でも仲がいいんだな！」と言った。葵は、「昔から甲賀の里から伊賀の里まで山を下りてすぐのお隣さん同士なので仲がいい！」と言った。勇斗は、「そうなんだ！」と言った。愛は勇斗に、「軟派なの！」と言った。勇斗は、「違う！」と言った。初音は勇斗に、「私いながら嫉妬します！」と言った。勇斗は、「軟派じゃない！ ちょっと訪ねてただけだ！」と言った。泰三は勇斗に、「女子に恥を

かかせたら面目ないぞ！」と言った。勇斗は、「俺は女泣かせじゃないよ！」と言った。家康に仕えて身を挺した隠密（スパイ）の服部半蔵が勇斗たちのところにやってきた。半蔵は悟に、「家康公が駿府城でご褒美（ほうび）をしたいと言ってらっしゃる！」と言った。悟は、「承知いたしました」と言った。半蔵は悟と勇斗と初音と泰三と愛と涉が率いる甲賀五人衆と舜とスティーブンを連れて駿府城へ向かった。駿府城の天守閣に招かれた悟たちは家康のいる間によばれた。粗食を好む栄養オタクの家康は自ら作った料理を用意していた。家康は悟たちに、「おのおのがた妖と戦って人々を救った！ お詫びに余が作った料理を召し上がってくれ！」と言った。悟たちは、「いただきます！」と言って麦飯と南瓜（かぼちゃ）と蓮根（れんこん）と芋と椎茸と人参と山菜のつけ揚げ天ぷらと八丁味噌焼きをした折戸茄子の田楽を食べて静岡本山茶の安倍茶を飲んだ。悟たちは、「いただきました」と言って食事を済ました。ちょうど昼時に食事ができて助かった悟たちは駿府城の外で待ってる伊賀と甲賀の忍者隊に申し訳なかった。勇斗は家康に、「二代目將軍を三男の秀忠殿に引き継いだ訳を教えてください？」と聞いた。家康は、「嫡男（ちゃくなん）の信康は織田家に災いを与える謀反（むほん）を起こしたために信長から首切りを言い渡されて切腹した。次男の秀康は小牧・長久手の戦いで勝って豊臣秀吉に養子として受け渡した。三男の秀忠は江戸城から清須城に余と離れて向かったが、上田城の真田軍と対立して遅れて清須城へ向かった途中で関ヶ原の戦いが終わった後にやってきた。関ヶ原の戦いに参加できなかった秀忠はとても初陣（ういじん）できずに悔やんでいた。余はそんな秀忠に対して口も聞いてやらなかったが、家臣の酒井忠次の説得で秀忠を受け入れるようになった。そして秀忠と共に豊臣秀頼と戦った大坂の夏の陣で秀忠の活躍ぶりで豊臣家を滅ぼした。江戸城で二代目の將軍を余が認めた秀忠に任せてゆっくりしておる」と言った。勇斗は、「わかりました」と言った。家康は、「他にはよいか！」と言った。勇斗は、「徳川四天王はどうしておりますか？」と聞いた。家康は、「今も駿府城の周りを護衛しておる。酒井忠次は人質になったり勢力争いの絶えない両国を交渉して和睦（わぼく）させたりとほとんどの戦いに参陣しておる。東国無双と呼ばれた本田忠勝は蜻蛉（とんぼ）が真っ二つに切れるほどの槍の名手でいつも蜻蛉切の槍を持っておる。猛者（もさ）の榊原康政は一目見て気に入って推薦した。最年少の井伊直政は赤備（あかぞな）えの赤鬼と呼ばれて恐れられていたが、関ヶ原の戦いで島津軍の武将に撃たれて落馬して敗れた」と言った。勇斗は、「わかりました」と言った。家康は、「川中島の戦いで甲斐国の武田軍と越後国ん上杉軍が膠着状態（こうちゃくじょうたい）を5回も続けた後に長篠の戦いで騎馬隊で攻めてくる武田軍を馬防柵を張った徳川軍が三段撃ちで鉄砲を撃って275間（500メートル）の先まで届く遠矢を放って刀と槍で矢継ぎ早（やつぎばや）に攻めて武田家を滅ぼした。本能寺の変で信長の家臣の明智光秀の裏切りで信長が敗れて天下分け目の関ヶ原の戦いで秀吉から小早川1家に養子に取られた小早川秀秋の寝返りで天下統一を果たした」と言った。勇斗は、「ありがとうございます」と言った。涉は家康に、「埋蔵金はどこに隠してあるのですか？」と聞いた。勇斗は涉に、「おい！ 何を聞いている！ 『そちは賊たちなのか！』と思われるだろう！」と言った。勇斗は家康に、「かたじけない！」と言った。勇斗に、「おもしろいの！」と言って誇らしげに笑った。家康は涉に、「軍資金の100万石の埋蔵金はどこかの金山に隠しておるが教えられない！」と言った。涉は、「かたじけない！」と言っ

た。家康は勇斗に、「関ヶ原の戦いで侍が持っていた鎧通しをやろう！」と言った。半蔵は勇斗に家康から受け取った鎧通しを渡した。悟は家康に、「駿府城に招くと申されてこちらら幸せでござりやす。申し訳ございませぬが、これで失礼しやす！」と言った。家康は、「町の復興の手助けまでしてくれてありがとう！」と言った。悟たちは駿府城を出てから櫓を出た。悟は勇斗に、「あの石垣は大名家たちの家紋が彫られてる。あれは家康が石垣に家紋を彫らして持ってこらして争いごと起こさねえようにしてたんだ！」と言った。悟たちは伊賀と甲賀の忍者隊と合流した。勇斗は口寄せの術で大鷹を呼び出してスティーブンと初音と一緒に大鷹に乗せて、泰三は口寄せの術で呼び出して愛と一緒に大鷹に乗せて、悟は口寄せの術で大鷹を呼んで舜と一緒に大鷹に乗せて、涉が率いる甲賀盗賊五人衆は一人ずつ大鷹に乗って、琵琶湖が見える山のふもとにある怪しい寺の門の前まで向かっていった。伊賀の忍者隊は伊賀駆け足で甲賀の里へ向かっていった。甲賀の忍者隊は駆け足で甲賀の里へ向かっていった。その夜は駿府城の近くの川で手筒の花火が打ち上げられて駿府の町の人々を盛り上げた。怪しい寺にたどり着いた勇斗たちは寺門の前に勇斗たちを乗せた大鷹が降り立った。勇斗たちは茂みに隠れてる猩猩のところに行った。勇斗は猩猩を探して笛を吹いた。猩猩は勇斗に、「ここだ！ おいらを置き去りにしていくかね！」と言って木の上から降りてきた。勇斗は、「よかった！ 君がどこかへいなくなっていたらどうしようかと思った！」と言った。スティーブンは勇斗に、「半蔵と家康に会うことにできて良かった！」と言った。勇斗は、「前回は会えなかったからな！ 今度、会えるときは戦いはないから！」と言った。スティーブンは、「そうだな！ それじゃあグッバイ！」と言った。勇斗は、「グッバイ！ 猫ちゃんによろしく！」と言った。スティーブンは猩猩と一緒に不思議な時空に入っていった。スティーブンと猩猩は未来のアメリカニューヨークのスティーブンのアパートの部屋の前にやってきた。猩猩は、「達者で！」と言って不思議な時空に入っていった。猩猩は寺門の前に戻ってきた。涉は勇斗に、「家康の埋蔵金はどこかの金山にあると聞いたけど、上野国（こうずけのくに）に違いない！」と言った。勇斗は、「どこの金山かわからないけど家康に聞いたのはまずかった！ 家康が笑っていたから助かったが、門前払いか島流しを食らうところだった！ 門前払いなら追放されるだけの軽い罰で済むけど島流しされたら自分で食べ物を探して生きていく過酷な罰を与えられる」と言った。涉は、「家康に冗談が通じて良かったよ！」と言った。涉が率いる甲賀盗賊五人衆は猩猩と一緒に不思議な時空に入っていった。涉が率いる甲賀盗賊五人衆と猩猩は甲賀の里の甲賀村にやってきた。猩猩は、「達者で！」と言って不思議な時空に入っていった。猩猩は寺門の前に戻ってきた。愛は勇斗に、「兄上！ 葵ちゃんにメロメロになって！」と言った。勇斗は、「馬鹿いうな！ 俺には初音がいるだろう！」と言った。泰三は勇斗に、「女泣かせなところは私に似たのだろう！」と言った。勇斗は、「女好きてこと！」と言った。泰三と愛は猩猩と一緒に不思議な時空に入っていった。泰三と愛と猩猩は伊賀の里にやってきた。猩猩は、「達者で！」と言って不思議な時空に入っていった。猩猩は寺門の前に戻ってきた。舜は勇斗に、「僕はやっぱりここに残る。僕はどうせ孤児で育った身寄りのない者だから」と言った。勇斗は、「明治初期に帰りたくなったら猩猩の気に入った安土山でこの笛を吹け！ いつまでいるか知らないけど、妖は500年ほど生きている」と言って笛を渡した。舜は、「わかった！」と言って笛を受け取った。勇斗は、「もう君を苦しませたくはない！ 竹田

博士からもらっていた血清だ！」と言って血清を渡した。舜は、「よかった！これで人間に戻れる」と言って血清を打った。勇斗は、「人狼になれない！」と言った。舜は、「ありがとう！自由の身だ！」と言ってどこかへ消えていった。勇斗は猩猩に、「俺は最後に行っておきたい場所がある！」と言って悟と初音と猩猩と一緒に安土城があった場所へ向かった。安土城があった場所付近まで来た勇斗と悟と初音と猩猩は安土山に見える安土城天守閣があったところを見た。悟は勇斗に、「安土城は造られてから7ヶ月後に焼失した。信長は本能寺の変で家臣だった光秀に敗れて安土城を占領されて三日後に安土城が燃やされた」と言った。勇斗は、「もったいないですね！」と言った。悟は、「7月の中旬頃は夜になると盂蘭盆会（うらぼんえ）で安土城の周りが灯籠の火で光り輝いていた。勇斗は、「お盆のことか！昔は1ヶ月早くやっていたらしい！」と言った。勇斗と悟と初音と猩猩は安土山の森林がなびく音と横笛を吹く音が聞こえてきた。悟は勇斗に、「昔からよく安土城の下の惣見寺三重塔（そうけんじさんじゅうのとう）のところで神楽をやっていた！信長はよくあそこで神楽を楽しんだ！」と言った。勇斗は、「そうなのか！」と言った。悟は、「信長は刀狩りをして百姓一揆やなんか起きさねえ争いのねえ平和な暮らしを目指した！」と言った。勇斗は、「そうなんだ！」と言った。悟は、「織田信長と豊臣秀吉の安土桃山時代は織豊政権（しょくほうせいけん）で江戸時代は江戸幕府を立ち上げて幕藩体制（ばくはんたいせい）でやってきた」と言った。勇斗は、「そうですね！」と言った。悟は、「この斬妖刀は家康から半蔵に渡って半蔵から拙者のところにやってきた」と言った。勇斗は、「その斬妖刀は俺の手に渡ってからいつの日にか折れてしまった！それでこの新しい斬妖刀になる」と言った。悟は、「この斬妖刀は関ヶ原の戦いで刀作りが盛んだった美濃国の鍛冶屋で匠に磨かれた。京にある鍛冶屋は大量の刀作りの時だけにあった！」と言った。勇斗は、「そうだろうな！」と言った。悟は、「酒呑童子は家康から埋蔵金を奪おうとしていた。

信長は家康から天下人の座を奪い返そうとしていた。酒呑童子の鬼魔王と信長の第六天魔王は忍者隊じゃあ倒せなかった！倒せたのは抑止力があったからだ！」と言った。勇斗は、「そうだろう！」と言った。悟は、「けどよ！掟破りした抜け忍を斬妖刀で切り裂いて罰したことはねえ！」と言った。勇斗は、「斬妖刀は妖を斬るものだからだ！」と言った。悟は、「あの琵琶湖の底に海鱗城があって河童だった後白河天皇が平安時代から生きて暮らしてるつう噂がたった。摂津国の魔縁山から流れる河にある河童の里で普通の河童もいれば猿河童も亀河童もいるそうじゃ！魔縁山の河から近江国の河まで泳いできたり河辺で相撲をとったり畑で好きな胡瓜（きゅうり）を取って喰べるそうじゃ！ときどき人間の足を取って河に引きずり込んで尻の穴から尻子玉を取って喰べるそうじゃ！」と言った。勇斗は、「やっぱりそうか！」と言って童子切りの刀を返した。悟は、「どうも！」と言って童子切りの刀を受け取った。勇斗は、「俺は立派な物の怪ハンターになるよ！達者で！」と言った。悟は、「しからば御免！達者でな！」と言った。勇斗は初音に、「初音！元に戻ろうぜ！」と言って初音と猩猩と元一緒に不思議な時空に入っていた。勇斗と初音と猩猩は伊賀の里にやってきた。伊賀の里にて、泰三は忍者屋敷で薬草を傷口に張って癒した。愛は忍者屋敷で初音と仲良く暮らした。勇斗は忍者屋敷で目目連（もくもくれん）と話した。目目連は勇斗に、「寂しかったよ！どこに行ってたんだい！なんとかいってみろよ！」と言った。勇斗は、「どこだっていいだろう！目障り

だ！ あっちへ行け！」と言った。スティーブンはナンシーの家でティムを迎えてニューヨークのアパートの部屋に戻って行って、翌日から理髪店で生活苦難で伸ばした髪を短く切ってまともな定職を探しに行った。勇斗たちは儂い旅路を終わらせた。奈良と京都で起きた百鬼夜行は残る鬼火など追い払って陀羅尼（だらに）の火で調伏（ちょうぶく）した。京と駿府の人々は鬼たちの暴落がおさまって安心できる平和な暮らしをした。（終）

---

Ninja Soul Dual 忍者魂大戦

---

著 八島 聖彦

制作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---